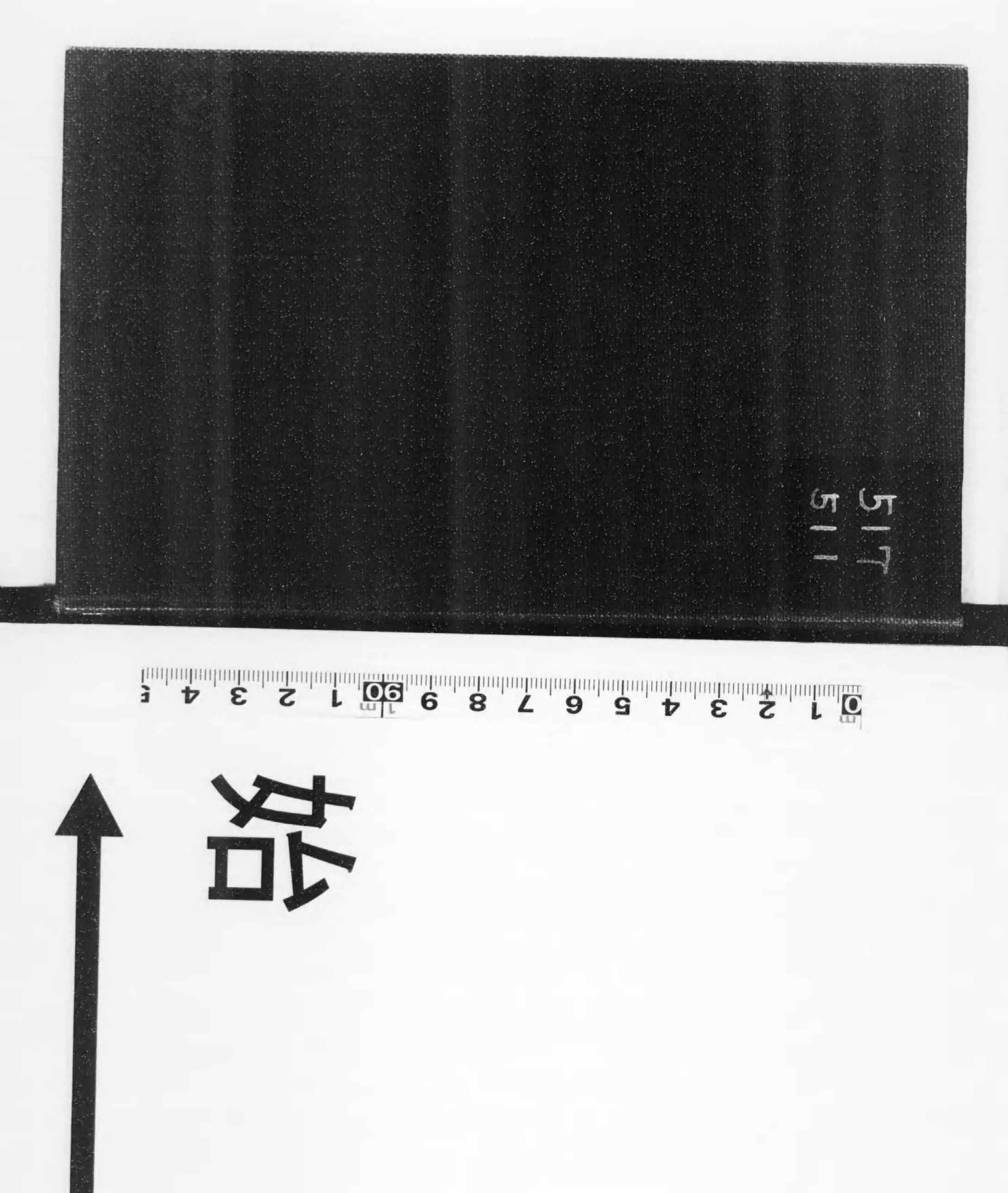

232

帝國圖書館藏

文壇太平記

相馬健作著

大正
15. 11. 10
内交

はしがき

本書は、世間一般の人々や、文藝の愛好者、またこれから文學に志さうとする人々に、先づ文壇といふものゝ正しい實體を知つておいて貰ひたいために上梓したのである。

本書編著については、多くの文献を渉獵參考したが、一々こゝには掲げない。他からの引用や、材料をそのまゝ拔いたやうなものには、必ず出所を明記しておいた。

著者はこれを匿名で發表する。それは、いまさうするはうがよいと考へるからだ。

著　者

517-511

■文士生活觀……二
一、文士の日常生活
二、原稿料
三、文壇游泳術
四、處世巧者、菊池寛

■文壇出世物語……四
1、文壇出世作調べ
2、舊文壇革新と田山花袋
3、『破戒』の作者島崎藤村
4、プロ文學の先驅、小川未明
5、好漢、江口渙
6、健筆家加藤武雄

■處女作物語……六五

一、一年半持ちあるいた吉田絃二郎
二、『修道院の秋』を書いた頃
三、『三等船客』の素性、骨柄

■作家印象記……八一
一、武藏野の只中の家
二、私の見た作家

■文壇盛衰記……一〇五
一、白樺の卷
二、新進作家の大同團結
三、プロ、プル對陣の卷

■文士今昔物語……一四五
一、佐藤春夫の今昔
二、里見弴の今昔

■女流評判記……一七七
現文壇に活躍しつゝある女流作家の天分傾向を卜す

■文壇修業記……一八八
一、職工から文壇へ
二、文壇へ出るまで

■天才物語……二〇四

■投書家物語……二二三
1、投書ものがたり
2、老投書家の精進
3、投書時代の思ひ出

■同人雜誌物語……二五〇
一、同人雜誌小史

二、『白樺』其の他
三、文藝戰線
四、同人雜誌の持つ意義、使命……八
■現代文士列傳……二六三
現文壇に活躍する文士全部を總評品隲す
■當世文士氣質……二九〇
■文壇ゴシップ、逸話……三〇〇
附錄　現代文士住所錄……三二五
附錄　出版法……三三一

文壇太平記

文士生活觀

一　文士の日常生活

アストロフ　そして教授は。

ウオイツキー　教授ときては、朝から晩まで書齋の中に閉ぢこもつて、いつも〳〵、

「智慧を絞つて、眉根を寄せて、

吾らは書く、書く、ひたすらに、

休息もなし、さればとて

後の譽のあてもなし。」

さ。可哀さうなのは紙だ。……

これはチエホフの『叔父ワーニヤ』中の一齣である。文學者が朝から夜まで、營々として机にしがみついてゐるさまを嘲笑していつたものであることはいふまでもない。

一般に、文士といへば、いつたいに不規則な生活をしてをり、朝は十一時にもならねば起きないし、夜は夜で、翌日の四時までもさわいでゐたり、思ひに耽つてゐたり、一寸したことにも神經をぷり〳〵させ、顏青ざめて、不健康で、こせこせと、そのくせ威張りやで、臆病なくせにえらいことばかり言つて、――まあ、だいたいこんな風であるが、小つぽけな文壇人なんて、まつたくこんな代物だと思へば間違ひはない。そして普通の人間とすこしも變つたものではないと思ふなら、一層間違ひないことである。

そこで、文士の日常生活がどうあるかを、彼等の自記から拔いて示さう。

その一　（室生犀星）

――起きる時、寢る時

わたしは朝眼がさめても暫くは、床の中でもじもじしてゐるのがくせで、起き出るのはいつも八時頃です。夜は、客さへなければ大概九時頃には、電球を黑のおほひでつつんで床にはいりますが、もし眠られないとさまざまの空想をしたり、或は又、仕事について考へたり、大抵そんなふうにしてゐるうちに眠つてしまふのです。床について本を讀んだことはありません。

――二つの新聞

讀賣新聞と、東京日々の夕刊だけと、この二つのほかに新聞は、わたしはみないことにしてゐます。といふわけは、もしも自分のことがかれこれ書かれてあるのをみるのがいやだからです。新聞を手にとつて先づ眼を惹かれるところは、社會欄の目立つ大きい活字の

記事か、又は文藝欄から讀みはじめます。雜誌の廣告も眼を通さずにゐられませんが、それよりも昂奮させられるのは活動寫眞の廣告で、殊に好きな映畫のそれが出てゐたりすると、胸がどきんどきんするくらゐです。相場欄などはわたしにはわからないから讀みもしないし、講談も前には讀んだものですが、この頃はもう讀む氣になりません。

——食事とその嗜好物

三度の食事は凡帳面にしてゐます。一たいわたしは健啖の方で、芥川君の倍も喰べる。朝は御飯を二杯、鷄卵のきみを三つ、おつけを一杯そのほかに何かのおしたし、くさやの干物みたいな鹽辛いものなど。晝はすくない方で、御飯一杯に何か野菜物、それに豚か牛かの肉をたべます。晩もまあそんな工合で、御飯よりおかずを餘計ほしい方です。兎に角わたしは大食ひです。そのかはり間食は、菓子にしろ果物にしろ一切しないことにしてゐて、餘所でさういふものを出されても喰べません。わたしの好きなたべものといふと、小鳥、鰻、干物、蟹、くるみなど。嫌ひなもの——といふより、何かしら輕蔑せずにゐられないのは卵燒です。そのくせわたしは卵燒をたべることもあるのですが。野菜物で一ばん好きなのは蓬蓮草、それからみつば。季節々々のはしりは出來るだけたべることにしてゐる。たゞ一つ、何より嫌ひなのは蓮根です。支那料理はあまりたべたことはありませんが支那料理にしても洋食にしてもさういふものゝ出る會などへは行つた時にはたべますが、料理としての嗜好は、わたしは矢張り日本のものをとります。

酒は飲みません。

わたしは時々、何か悲觀するといふやうな心持になると、人生は食ふことのほかに何にも樂しみはないと思ふので、それでさういふときは、頻りに食ふのです。

——茶と煙草

若い時分には上等の茶を飲みましたが、この頃は番茶にしてゐます。それも烙じない方を、可なり飲む方です。紅茶とか珈琲とかは、飲みたいと思つたこともありません。

煙草は、元は朝日を喫ひましたが、今は敷島です。それに以前、スタアを喫つたもので

すが、震災當時スタアがなくなつたので、墮落して、エアシップを喫ひはじめ、未だにそれを喫ひつゞけでゐます。わたしには敷島が御飯で、エアーシップがおかずとでも云ふほど、そつほどこの二つをちやんぽんにやつてゐます。その上時々、料理屋へ行くやうな氣持で、ネビイキヤレットやエジンバラなどの西洋の刻みをパイプですひます。一日の喫煙量は、エアーシップ十五本ぐらゐと敷島五本ぐらゐですが、料理屋の分は非常に多い。始終パイプをくはへてゐると云つてもいいくらゐです。しかし外へは、あまりくはへて出るやうなことはありません。

——入浴、散髪、服裝

入浴はまづ好きな方で、この頃は隔日ぐらゐに家で風呂をたてます。湯加減は熱からずぬるからずの熱度にしてゐます。床屋へはひと月に一度、本郷のバリイで刈らせます。は三日に一度ぐらゐ、自分で西洋剃刀でそりますが、それも天氣のいい日にはそりたくない、雨の日などはそりたくはないと云つた氣持です。洋服は前には着たこともありますがどうも肩がこつて氣持が苛々して、人とゆるやかな談笑ができなくなるので、この頃はいつでも和服で通してをります。

——旅行、散歩、乘り物

春二月の旅、夏は信濃へ、とこれまでのわたしは一年にその二度の旅をしてきました。夏の信濃で暮すのは、暑さに體が弱るための實用的な考へからです。宿屋へ泊つたときには、わたしは宿帳に著作業と書きます。散歩は一年あまり郷里にゐて、毎日河べりをぶら〳〵歩いたのが習慣になつて、この頃も朝飯前二十分ばかりやります。乘りものは今度東京へ來てから、市營の圓太郎自動車と乘合自動車とに好んで乘りますし、時々タクシーにも乘りますが、タクシーは晝間は厭な氣がするので乘るとすると夜にかぎつてをります。人力車へは、郷里へ行くと何んとなしに乘りたくなりますが、東京ではちつとも乘りたいと思ひません。

——草花と家畜

西洋の草花は、わたしは大嫌ひですが、日本の草花――といふよりも草花の實は非常に好きです。部屋に活けて樂しむのも多く、花より實にしてゐます。犬とか猫とか、さういふ家畜は嫌ひになりました。と云ふわけは、わたしはおせつかいに出來てゐるせいか、犬でも猫でも、或ひは小鳥などにしても飼ひはじめると、うちこんでいろいろ世話をしずにゐられなくなりますから自然頭が疲れる。それが嫌ひになつたのです。

――芝居、寄席その他

歌舞伎芝居、わたしは一ぺんも見たことがない。見たいと思ひながらつい出遲れるといふ工合で未だに見ずにゐるわけですが、築地小劇場へは、この間『櫻の園』が上演されたとき行つてみました。あの新劇は自由劇場以來始めてみたものです。寄席へは以前、落語を聽きに二三度はいつたことがあるけれど、此頃はさつぱりそんな氣持になりません。音樂は洋樂、邦樂いづれも僕の生活と關係がないと思つてゐます。時とすると西洋のものなど必要のやうな氣持になりますが、しかしすぐ又、そんなものは自分に遠いものだ、矢張

り必要ではないといふ氣持になつてしまひます。繪では西洋のものがよくもわからないけれど好きです。日本のではいいものなら好きにもなりませうが、取りたてて特に好きといふほどのものをまだ見てゐません。彫刻では、あの有名なロダンのものは嫌ひです。活動寫眞はずゐぶん好きで一週間に一度は必ず見に行きます。今のところわたしは、アメリカのもので結構です。その方の最負の俳優は男優にも女優にも澤山ありますが、フランク・キーナンといふ老優が、知つてる人はあまりないかも知れないが、勝れた性格役者としてわたしは推賞してゐます。

――餘技と陶器

わたしの餘技はまづ花遊びぐらゐのもの。も一つ、仕事のひまには俳句を作ります。趣味として陶器を蒐めてゐます。支那のものや南蠻ものや、それからこの頃は日本の古いものが非常に好きになりました。備前、瀨戸、しがらぎ、丹波、などのものです。染附ものは嫌ひになりました。

——書齋の光線

書齋の光線は明るいのを好みます。書齋の裝飾としては、掛物一幅、紫檀の机一脚、壺一つ、これだけあれば滿足してゐます。

——創作氣分の季節その他

創作氣分にかなつた季節といふと、わたしには冬から春さきへかけての時分が一ばんいいようです。秋もいいが、夏はいけません。

一日のうちでは、この頃は午前から午後へかけて——十時頃から二時頃までが一ばん書ける時です。夏はもつと早くからとりかかります。この時間中に訪問客と話をすると、書くものがどうもうまくいきません。執筆中人の足音や子供の泣聲などが前には氣になつたものですが、この頃は何んとも思はなくなりました。

——書き出すまで

書き出すまでは毎日ぶらぶら暮らしながら書かうとするもののことばかり考へてゐますが、いざ書き出せばずうつとつづけて書きこなします。

——一日書く枚數

書けない時には、一週間も十日も書けませんが、書くとなると一日七枚乃至十枚ぐらゐのところです。

——行き詰つた時

書いてゐるうちに行きづまるとすぐにやめて、原稿紙を部屋から片附けてしまつて、あとはただぶらぶらしてゐます。

——モデル

題材の人物はすつかり空想でつくりあげることもあるし、モデルに空想を繩のやうに綯ひまぜて書くこともあります。

——原稿用紙、萬年筆

原稿用紙は、青罫の四百字詰のを誂へることにしてゐます。萬年筆はオノト。手紙だけ

毛筆で書きます。

——子供のこと

子供は女の子ひとりです。名は朝子、今年三つになります。子供については始終、病氣をしないやうに、と思つてゐます。病氣にかからるとわたしは不愉快で、何も手につかない。兎に角わたしは、子供に對しては溺愛する方です。

その二（犬養　健）

——起床、就床

朝、眼が覺めるとすぐ床を出る。時間は、仕事をしない時には七時か八時。仕事にかかると、氣候のいい時には三時、氣候がわるい時でも四時には起きる。こんなに早く眼が覺めるのは、運動不足が原因してるのだと思ふ。寢るのは、仕事にかかつてゐる時には早いが、大抵、十時頃に電燈を消して寢る。寢床で本を讀むやうなことはない。

——新聞

新聞は、時事、讀賣、朝日、日々の四つとつてゐる。朝ちよつと眼を通して、晝飯後ゆつくり讀む。殊に社會欄などはさうしてゐる。讀み始めるのは文藝欄からで、運動記事なども殘らず見る。家庭の影響で政治欄もひととほりは讀む。それから論說も、むづかしい豫算などの外は大概讀む。

——食事、間食、茶

食事は小量の方で、そして割合に規則的にしてゐる。仕事にかかつてゐない時には家族と一しよに喰べるが、仕事中ははなればなれに喰べる。酒は飲まないが、上戸むきの料理が好きである。洋食も喰べるには喰べるが、どつちかと云へば日本食が好きだ。

間食はする。間食に嫌ひなものはない。果物などは非常に好きといふ事ではないが喰べる。

茶は紅茶が最も好きである。

——植物、動物

植物は、草花よりも庭樹——椎、楓、青桐といふやうなものを好む。

動物では、犬が好きで、セッタアを一匹飼つてゐる。猫も好きだ。しかし、日本の、炬燵の上などにうづくまつてるやうな猫は嫌ひだ。ペルシヤ產の慓悍なやつがいい。これも一匹飼つてゐる。家の犬と猫は仲が好い。しかし、どうかすると嗔嘩をはじめる。そんな時僕は、わけもなしに猫をぶつ。實際はどつちが惡るいのか知らないのだが。

——繪畫、音樂、芝居、映畫

繪は、最近、暫く遠ざかつてゐた後期印象派のものを見たいと思ふ。殊にその原畫を見たいと思つてゐる。

音樂は、西洋のものが好きで、以前には音樂會があると缺かさず行つたものだが、この頃はそれほどではないが、兎に角、芝居へ行くよりは多く行く。

芝居は、どつちかと云へば新劇の方が好きだ。見物には大抵自分一人で行く。連れがあるのもいいけれど、ただどこそこで幾時に落合ふといふやうな約束をしたりすると、その約束が三日も四日も前から氣になつて、氣持が落着かなくて困るので、結局自分一人でぶらぶら出掛ける。

活動寫眞は、比較的文藝物が好きだけれど、それも非常にすぐれたものならいいが、變な、惨つかなものなら、寧ろ娯樂本位のものを見た方がいいと思つてゐる。いつかの「カラマゾフ兄弟」なども、原作を傷つけるも甚だしいものだつたので、見るではなかつたと後悔したくらゐだ、あゝいふひどい文藝映畫に比べれば、單なる興味中心のアメリカ物の方が、こつちも初めからその氣で見るだけに厭な思ひをせずにすむ。

——和服、洋服

洋服は歩くときひつかからなくていいが、そのかはり肩がこつていけない。で、やつぱり主として和服にしてゐる。

——入浴、散髮

入浴は好きだから大概毎日這入る。

散髪の方は、無精だからちよくちよく刈らなければ氣がすまないといふ方ではない。髭は時々自分で安全剃刀で剃る。

——旅行

旅はいいと思ふが、云ふほどの旅行もまだしてゐない。去年中國地方へ旅して、郷里岡山縣に暫く滯在したことがある。あの邊の產物では魚類——殊に、鯛などはうまいと思つた。この次ぎには山陰道の方へ行つてみたいと思つてゐる。

——野球、庭球その他

戸外運動は好きだ。殊に野球、庭球いづれも好きだ。この頃の庭球の選手は特に好きである。自分もそのうちやりたいと思つてゐる。

煙草は全然喫まない。

——書齋

書齋は、壁の少ない、天氣と關係の多いといふやうな感じの部屋を好む。大體暗くない方がいいが、しかし、日が射し込むのも厭で、そんな時には、日の射す方の障子の硝子に紙をあてゝピンでとめて置く。書齋に繪を置くと、其繪の氣持に惹かれていけないので、成る可く繪は置かないやうにしてゐる。春の陰氣な日には、あちこちに花を活けて置く。

——創作氣分の湧く時

秋の末から春へかけて一ばん創作氣分が湧く。一日のうちでは、氣候によつては、朝早くか或は夜執筆するが、冬のその時間は寒くて駄目。

一日に書く枚數は三枚から十枚位まで。但し下書きをする。

新聞からヒントを得たことはない。

——書き出すまで

書き出すまでは、矢鱈散歩する。その間材料について空想するが、甚だ愉快だ。愈々書き出すと、始めはあまり早く書けないが、終りの方へいくと非常に早く書く。

——人物の性格

今まで書いたものでは、靜かな落着いた性格が多かつたが、今後何か材料があつたら、強い性格を書いてみたいと思つてゐる。前に云つた後期印象派の繪を見たいといふのも、詰りそれに關聯してゐるのである。

——叙景

散歩などに出て、特に叙景の爲めに注意するといふこともないが、路傍の草などに妙に氣を惹かれることがある。それは兎も角、僕の書くものは叙景が多い方だらう。

——苦心するところ

僕がこの頃用心しようと思つてゐることは、細かい味にうかされると全體としての線が弱くなるから、それを避けたいといふことである。

——氣になること

人と逢ふ約束などをすると、その約束の日約束の時間が、三四日も前から氣になつて、その日その時間に自分は書くものに油がのりはしないか、といふやうなこと迄想はれて執筆中それがどうも氣になつて困る。

——行詰つた時

執筆中行詰つた時、人と話などすると猶氣がぬけていけないから、成る可く家人をも避けるやうにしてゐる。しかし、そんな時は大抵、ぶらりと散歩に出る。そして、活動寫眞の立見をすることもある。それも大概一卷が終らないうちに出てしまふことが多い。

——原稿用紙、萬年筆

原稿用紙は、四百字詰の、茶色の罫の、紙質の光らないのが好きだ。震災前には古梅園で作らしたものを使つてゐたが、震災後古梅園がどこかへいつてしまつたので、止むを得ず神樂坂の相馬屋のものを、友人と一しよに用ひてゐる。

萬年筆は太字のウオタアマンを愛用してゐる。しかし手紙などは卷紙に毛筆で書くのも好きである。

二　原稿料

今の文士は原稿料によつて食つてゐる。つまり賣文生活をしてゐるのである。かういへば、それでは昔の文士は文を賣らなかつたといへば、或ひは「然り」といふことが出來るかもしれない。

少くとも、昔には文士といふ職業はなかつた。それが、今日ではもう、何も彼も、小說を作つたり、詩を作つたりするのは、立派な「職業」であつて、一枚（一枚は四百字である）いくらと計算され、取引されるのである。

それでは、今日いはゆる一流どころの文士の收入は？といへば、佐藤春夫氏が自ら云ふ所によると、どんなにしても月千圓の收入はある。そして、それだけの收入を得るためには、一日何ほどの仕事をすればよいかといふに、前記の四百字の原稿用紙に三枚か五枚か書きなぐればよい。そして、その三枚か五枚かを書くことは、さうたいして苦痛ではない

といふのである。

一日に三枚五枚はおろか、健筆家になると、四十枚五十枚をかくことは稀れではあるまい。一枚の原稿料が、普通三圓から十圓、一流文士が婦人雜誌から得る稿料はたいてい二十圓、谷崎潤一郎氏は一枚三十圓貰つたことがあるといふ。

そして、それらの原稿は、最初の用をつとめて後、多くは單行本となり、選集となり、傑作集となり、全集となりして、三度も五度も金になる。

とにもかくにも、ぶらぶらと三枚か五枚かほどのものを書いてをれば、月千圓になるのでは、萬更捨てた商賣でもあるまい。否、おそらく今日の仕事としては、大臣にまさる數等のものといふことが出來よう。

だが、これはあくまで少數の文士のことであるが、たとへ五流の文士にしても、當今商賣の雜誌新聞で、一枚二圓以下の所はあるまいから、他の職業に比べれば、ずつと怠けてゐて、立派に食つていけるのである。

どんなにかつまらないヘボ文士でも、新聞雜誌の編輯者におべつかが上手で、立ちまはりをうまくやりさへすれば、口の干上ることはないといふ。次に、その立ちまはり、つまり文壇遊泳術について少しく書いて見る。

三　文壇游泳術

文壇とは何か、――鹿爪らしいことは云はないことにして、一口にいへば、文士の書いたものが發表され、それが讀まれ、評判される所、もつと簡單にいへば、雜誌新聞の文藝欄を中心に成立するマーケットをいふのである。

文壇を支持するものは勿論讀者であるが、それを左右するものは、より多く新聞雜誌の營業者である。作家は文壇の支配權をもつものゝやうであるが、これはあくまで素人考であつて、文士はほんの少しもそれをもつてゐない。文士は獨立してゐないのである。

文壇のあらゆる腐敗と、不名譽と、悲哀がこゝにある。

本質的に、いかに偉大な作家でも、營業者がこれを採用してくれなければ、それを讀者に問ふことが出來ない。（その一）

さて、幸ひに營業者が採用したとして、讀者がこれを歡迎しない場合には、營業者は再びその作家を顧みはしない。（その二）

だいたいにおいて、一般讀者がもとめるものを、營業者は提供しようと心掛ける。ゆゑに、その讀者の要求に適合する作家なら無難に、獨立し、營業者はその門をたゝくであらう。然るに、一般讀者が、常に、眞に自己の要求するものを要求するのであれば、もう問題はないのである。文壇は讀者と文士によつて支配されるのであるから。

けれども、資本主義が、あらゆる生活をおかしてゐる今日、民衆は最早、自分自身の頭でものを考へることも、自分自身の力で自分の生活をすることも出來なくなつてゐるやうに、一般讀者もまた營業者の巧妙なわなにかゝつて、自分自身の要求も判斷もなくして、狡猾な營業者が生産する商品に隨喜してゐる有樣なのであれば、文壇は、資本社會の消長

によつて消長するほかはない、その支配權は確實に營業者の手にあるといふことになるのである。（その三）

あのまゝで朽ちさせるには惜しいと思はれるものが、次第に忘れられて行き、あんな俗物がどうしてこんなに聲名をもつてゐるのかと思はれるやうなものが、のさばりちらしてゐるのはこのゆゑである。

そこで、いはゆる文壇游泳術などが、必然的な事實として存在理由をもつのである。

文壇游泳術第一の秘訣は、だいたい前の説明ですぐ想像出來ると思ふが、ざつくばらんにいへば、營業者――新聞雜誌の編輯者――のお目にとまり、そのお氣に入るやうにつとめることである。編輯者に閑却されたり、嫌はれ憎くまれたりしては、もうまつたく、口があがつてしまはねばならない。

これは少し氣骨のあるものであれば、隨分たへられないことであらう。天才的で氣骨あるものは、生前大概不遇であるべき運命をもつてゐる。（もつとも、これは自分の作品が商品として取扱はれることに不滿をもつばかりでなく、營業者が狡猾に讀者の興味をつるとは反對に、讀者の痲痺した眞實を呼びさまさうとして、勢ひその古傷にさはるやうなことにもなるからであらう。）

然るに、その時代にもてはやされるやうなものは、相憎とかうした氣骨などは持ちあはさないのであるから、無名の間は先輩から周旋して貰つたり友人關係から持ち込んだり、それでいけないときは何等かの手管を考へて編輯者に近づき、待合を馳走したりなどしてべこべこ機嫌をとり、有名になると、今度は無智な讀者を營業者が支配するのを、それをまた自分が支配するのだといふ氣になつて、臆面もなく、どの社はいくら出すからとか、前にはいくらであつたからとかといつて、いくらでなくては書かぬとか、何とか、高くとまり、かと思ふと、また、誰某のものをのせると、自分は一切書かぬなど脅迫をもやりかねまじい。

かうなれば、その營業者は、この人氣作者を他の營業者にとられたくないために、原稿

料をせり上げ、その作家は、他の競爭者に追ひぬかれないため、あらゆる防禦をすることになる。

すこし或る作家が勢力を得れば、自然と、その作家に媚びを賣り、或ひはその競爭者の惡口を云ひ、賣文の邪魔をし、作品を批評などでコキ下す等の掛引をやつて、自分の身をかため、利益を得やうとする蚊文士どもも隨分と出て來る。そして、これを抱容することによつて、彼はいよいよ大をなす。

こんなことは、あり得べからざることではない。否、こんなことは、今は公知の事實である。文壇で商賣人中の商賣人といはれる菊池寛氏が、その今日あるを得た裏面に、かうした策略が少しもなかつたとはいへないであらう。

四　處世巧者、菊池寛

その昔、文壇で收入の「取大將」は夏目漱石と長田幹彦で、月五六百圓から千圓近くあつたといふ。しかし、いま菊池寛の收入を調べて見れば、おそらくは、その漱石幹彦の收入の十倍位はたしかにあるであらう。

或るパトロンから學費を貰つて、わづかに大學の帽子を頭に冠つてゐた京都帝大を出ると、先輩知己の紹介で辛うじて時事新報の記者といふ職業にありついたが、その給料はいくらでもなかつた。

その時分のことであらう、寛にとつては莫逆の友である芥川龍之介が初めて「羅生門」を上梓して、その出版紀念の會が催ふされたとき、二圓の會費がなくて、その席に出られなかつた彼、それが、まだそんなに遠い昔のことではない。

それが、どうして短日月の間に、今日の地位を作り得たかといへば、彼のいくらか出世作と思はれるものは、「無名作家の日記」「忠直卿行狀記」「恩讐の彼方へ」などであらうが、世の中に廣く名を知られたのは、通俗新聞小說「眞珠夫人」を、大毎と東日に掲げて喝采されたことと、劇壇の王者中村雁次郎一座によつて「藤十郎の戀」が上演されて人氣

を呼んだこととである。彼の收入はそれ以來文壇のレコードを破つて最高額を示したのである。「眞珠夫人」は白蓮夫人をモデルにしたのだといふことから評判が立ち、明らかにブルジョア享樂者に媚びるやうな卑小な態度がそれらの讀者の滿足を買つたので、彼の俗才が時好に投じたのだと見てよい。

彼はかうして一躍出世した。しかし、そのころ、一面にはまたブルジョア文學と反對の立場に立つ、いはゆるプロレタリア文學の運動が漸く擡頭しつゝあつた。これは別項の「文壇盛衰記」にもあるが、目先のきく彼は、この氣運を利用することを忘れなかつた。彼はブルジョア衆愚を背景として、傍若無人の暴論をやつてまんまと喝采を博したのである。たとへば、プロレタリア文學者は、自分の口すら糊せない有樣でゐて、社會運動などとは片腹痛い、自分が立派にひとりだちが出來るやうになつたら、社會運動でもなんでもしろ、とまあかうだ。

みんながみんなひとり立ちが出來るなら、何も社會運動をする必要はない。けれども、ひとり立ちをしようにも世間がどうしてもそれをさせず、學問をすることも、文藝することも、すべて或る一部の階級者に專有されてゐる今日、かれも人、われも人、ひとしく公平無標準に、生存權も文明享受權もある筈、だからさうした社會を來らせるべく被壓者が必然的に起す運動、ある個人の力が全體を率ゐ、また社會惡を一擧にして屠るのでなく、個々人の自覺が全體に相互作用して成就する革正、ゆゑに、全社會は相關關係にある、これが、即ち社會運動である以上、菊池の態度はこの根本的事實に無智無理解、且つ、自ら社會人としての無資格を曝露したものであるに拘らず、たまたま、社會運動を喰物にするプローカーの存在に對して示す一般民衆の嫌惡あるを奇貨として、この反動的思潮に乘じたのである。陋とも陋である。

彼は「文藝春秋」を發刊して、乾分を集め、ゴシップ的興味を以て讀者を吸收し、ゴシップ作家の集團的勢力をもつて敵を壓倒しようと企てた。小川未明が、その文藝春秋に、五六枚（文藝春秋はそれ以上の原稿をのせなかつた、もつて與太雜誌たるを知るべし）の

文章を書いたとて、プロレタリアの俊英前田河廣一郎がおこり出し、味方を賣る行爲だとて數度の批難應酬をやつたこともあるが、わが國の文壇が今日見るやうに不眞面目な、ふやけ切つたものとなり終つた原因は、これらのゴシツプ的作家跋扈にあるといつても決して過言ではないと思ふ。「東京は熱病にかゝつてゐる」に、この間の消息は委曲を盡して描かれてゐる。

とまれ、菊池寛は、彼の俗才が時好に投じたこと、目先がきくことによつて、今日の勢力をきづき上げることが出來たのである。作家としての價値を問題にするものは、いまは殆どないに拘らず……。

文壇出世物語

1　文士出世作調べ

一

出世作、といへば勿論處女作の意味ではない、その一作品に據つて、作者の位置——文壇的地歩の確立となり、社會的には一人の作家として知られる——をはつきりと浮立たしたものでなければならない。作家が作家として立ち得た最初のレコード。それだ。

「出世作調べ」をやることは、勢ひヂヤーナリズムの歴史をひもとく結果になるのであらう。そしてそれがまた筆者の記憶に殘されたものゝ範圍を出ないであらうことも、はじ

めにお斷りしておく必要があるやうだ。

坪内逍遙、森鷗外、尾崎紅葉と筆者は筆をおこしたい氣持ちを持つてゐるが、それはかへつてうるさいやうだから自然主義時代からはじめるとしよう。田山花袋氏の「布團」などこそ最も「出世作」らしい出世作だつたに違ひない、同時に自然主義といふものゝ論議を裏づけた有力な作だつた。これは忽ちモデル問題を起した。人生の眞を描くことを力說した自然主義作家が、創作のテーマを手近かに求めたのが必然ではあつたといふものゝ、その後もモデル問題は常に惹起された。島崎藤村氏の「春」もさうだつた。德田秋聲氏の名聲が大いにあがたのは「あらくれ」以後だつたやうに思ふ。

「別れたる妻に與ふ」を書いて、その綿々たる情緒の中から浮き上つたのは德田秋江いまの近松秋江氏である。この小說はすばらしい好評を得た點で、ずつと後になるが宇野浩二氏が「藏の中」を發表した時の世評とよく似てゐる。「藏の中」を發表したちよつと前の宇野氏は、かなり生活も苦しく他に事情もあつたりして、間借りをするのに變名を用ゐてゐたやうな有樣だつたさうだ。出世作が名實共に出世して、物質的にもずつと惠まれるやうになつた作家も尠くない。菊池寬氏はその甚だしい一例だ。

現在は收入に於ても文壇を代表する菊池氏も、學生時代から新聞記者時代は決して豐かではなかつた。それが確か「忠直卿行狀記」だつたと思ふ、一度出世作を出してから忽ち一流の作家となつてしまつたのだ。しかし菊池氏らが據つた雜誌「新思潮」の同人中、久米正雄氏は既に大學在學中「牧場の兄弟」でその非凡な劇作の技倆を認められてゐたし、芥川龍之介氏の「鼻」は芥川氏に今日あるの位置を與へてゐたのだつた。菊池氏だけが無名作家だつたのだ。この邊の消息は氏の「無名作家日記」に明かである。

二

谷崎潤一郎氏が文壇へ出現したのは、まつたく彗星的だつた。自然主義文學に飽きてゐた人たちにとつて氏の「刺青」その他のあのひどく惡魔的な藝術は大きい驚きだつた。黑い翼をひろげた蝙蝠は氣まゝに濶步し步いた。

佐藤春夫氏は「田園の憂鬱」によつて、一躍流行兒になつた。田山花袋氏がこれを激賞した。それまでの佐藤氏は詩人として知られてゐたに過ぎなかつたのである。同じ頃いや二三年後であつたらうか、詩人室生犀星氏が華々しく作家として立つた。舞臺は「中央公論」で、試みに送つた原稿が、編輯者瀧田氏の發見推賞するところとなつたのである、「性に目覺める頃」といふのがその題だつたと覺えてゐる。

上司小劍氏の「木像」正宗白鳥氏の「泥人形」小川未明氏の「魯鈍な猫」等、みんなそれぞれの出世作として當時の文壇にいい批評と反響を呼び起したものである。

中村星湖氏の「少年行」は、早稻田文學の募集に應じて發表されたもので、出世作であるとともに處女作でもあつたやうに思ふ、中村吉藏氏の「無花果」もさうであつた。

出世作でぐいと頭を擡げる作家に限つて、特殊な文體を持つた作家が多い。芥川氏の「鼻」がさうであり、宇野氏の「藏の中」がさうだ。「ことである。」「ものである。」といふ宇野氏の文章はよく投書家などに眞似られたものだが、鈴木三重吉氏が「小鳥の巢」で賣り出した頃も、その「をんなは」だの「がちがちしい頭」などといふのが流行したものだ、室生氏の「うどんのやうにげらげら笑ふ」などもさうだつた。近くは新感覺派の諸氏、ことに横光利一氏の「無禮な町」などが、若い作家の上に影響したことは爭へない事實であらう、もつとも横光氏の出世作は「日輪」だかもしれないが。

新感覺派といはれるうちでも片岡鐵兵氏は、ずつと以前發表した「舌」によつて、すでに認められた人だ。新感覺派ではないが新進作家の中の流行作家佐佐木茂索氏は「ぢいさんばあさんの話」といふ佳篇を、五六年も前に書いてゐる。

いつたいに最近の文壇は、一篇の作品によつて確固たる位置を得るなどのことが出來ない傾向になつてきてゐる。奇功を立てゝ一躍一方の指揮官にはなれない。戰國時代的英雄崇拜的でなくて、ぢりぢり盛り上る力の時代になつてきた故でもあらうか。もつともかうした傾向が強ち新進文壇にのみあるとはいはない。加藤武雄氏、水守龜之助氏、細田源吉氏、三上於菟吉氏、谷崎精二氏、加能作次郎氏、などの中堅作家諸氏も、華々しい出世作

といふものがなかつたやうに思はれるがどうだらう。

廣津和郎氏などは華々しい方だつた、「轉落する石」「神經病時代」が續けざまに好評を呼んだ、あれは「中央公論」に載つたものである。「中央公論」に掲載された作品が出世作となつた者はかなり多い、既に書いたものゝのほか、すぐに念頭に浮ぶものでも宮地嘉六氏がさうだ。新井紀一氏がさうだ。瀧井孝作氏がさうだ。中條百合子氏がさうだ。中條氏の最初の作は「貧しき人々の群」で、當時作者は二十才足らずの小娘だといふのでひどく評判になつたものである、坪内逍遙氏の推薦だつた。

「改造」は時々無名作家を紹介する、それが出世作となつた人々は、諏訪三郎氏、尾崎士郎氏等がある。尾崎氏の長編「逃避行」は改造社から出たもので、處女作に近いものである。

三

出世作が物質的にも惠まれる結果が多い、と前に述べた。しかしそれは一例である。他の反例としては葛西善藏氏などがある。氏の「子をつれて」は名作の評高かつたが、氏はいまもずつと貧しい精進をつゞけてゐるのだ。

喜劇のラリーシモンが大好きだといふ稲垣足穂氏は「一千一秒物語」といふあの不思議な物語で有名になつた、金子洋文氏は表現派戯曲と銘打つた「洗濯屋と詩人」だつた、題は忘れたが藤井眞澄氏の出世戯曲も表現派のものだつたと記憶する。

プロレタリア文學擡頭に際して乘り出した前田河廣一郎氏の「三等船客」は、氏をプロ派の飛將にするだけのものはあつた。太い荒削りな線がビンビン緊張してゐて強く感じられた。宮島資夫氏の「坑夫」は發賣後間もなく禁示を命じられたのだつたが、讀んだ人は手腕をはつきり知つた筈である。細田民樹氏の「女をめぐる父子」はいろいろな意味で批評壇に問題を湧き返らせたものだつた。

南部修太郎氏の出世作はたぶんあの情緒を描いてものなつかしい思ひを抱かせる「修道院の秋」といふ北海道のトラピストを描いたものだつたやうに思ふ。

島田清次郎氏が「地上」の一卷を投げつけて現はれた姿こそ大正文壇に於て、最も華々しいもの丶一つであつた。賣れ行きもすばらしいもので賀川豐彦氏の「死線を越えて」以上だといはれた。女流詩人高群逸枝氏が「日月の上に」といふ長編詩を發表した際にも、文壇は擧げてこの無名の一少女の作に注意したものである。

コントの紹介者岡田三郎氏はフランス遊學以前、すでに「涯なき路」の一作によつて知られてゐた。人生派を唱ふる戸川貞雄氏の「蠢く」が出たのもずゐぶん前のことである。

犬養健氏が出世作といふべき「あひるの子」を書いたのはもう七八年前にもなるだらうか、この一作は次の白樺時代を思はせた作品だつた。白樺といへば、その同人武者小路實篤、長與善郎などは「白樺」を土臺にして漸々力を張つて來たが、里見弴氏では「俄あれ」有島武郎氏では「宣言」が大いに認められる素因になつてゐたやうだ。同じ頃、江馬修氏の「暗礁」が青年子女の間に人氣を沸騰させたことも忘れてはならないことであらう。

中村武羅夫氏は文壇生活二十年と稱してゐるが、作家として立つたのは割合に後年のことで、長編「人生」が最初であつた。

小說家の方はこれだけにして、すこし詩人の方を調べてみやう。

北原白秋氏は「大東京の賦」といふ何百行とかいふ長詩が出世作だつた。三木羅風氏は十八歲にして詩集「廢園」を著し天才の名をほしいまゝにした。萩原朔太郎氏の「月に吠ゆる」は自費出版だつたさうだが賣行きはよかつた。そして本の價がやすいため賣れ丶ば賣れるほど損をしたといふ話だ。白鳥省吾氏は「世界の一人」が處女詩集だつたやうである。詩人の場合には第一詩集が出世作に當つてゐるやうに思ふ。（—石野葉吉）

2　舊文壇革新と田山花袋

わが國に近代文藝の潮流を移入し、明治文壇當初の革新者としての田山花袋の名は永久に忘られることはあるまい。

彼には學歷といふものは殆どない。上州館林の小學校を出たきり。そして上京後、彼は

毎日辨當をもつて上野の圖書館に通つた。西洋の小說とか、西鶴の本などを、彼はそこで讀んだ。尾崎紅葉、幸田露伴などの名が世上には高い時で、また長谷川二葉亭の「浮雲」は當時の文學青年に深い感動を與へた。

そこで、花袋もまたロシアの作家のものにあこがれるやうになり、ゴルキー、トルストイなどの寫眞版などあるものを見ると、うれしさのあまり、感激して人知らぬ寶物でも得たかの如くに、それらのものをくり返しては耽讀したものだといふ。

遂に彼はたまりかねて、二葉亭を訪れて行つた。ロシア文學の「細かい彫刻のやうな筆致」とか、ロシアの作家のことなどを質問するために。このとき、二葉亭は彼にトルストイや、ゴンチャロフの話をしてきかせた。

そこで彼は大家に面會出來る自信を得て、紅葉山人にあてゝ、誰からの紹介もなしに、手紙で面會を求めた。紅葉からは直ちに返事があつて、千紫萬紅といふ雜誌の成規まで添へて、君等のやうな熱心家の爲めに造つてある雜誌だから、入會したら何うか、そしてその方の幹事は水蔭がしてゐるから詳細はその方で聞いてくれたまへ、といふことまでつけ加へてあつた。

彼は意を決して紅葉山人の宅を訪れた。これまでに北町の通りを歩いてゐる時、屢々尾崎と書いた表札と、硯友社と書いた郵便箱とは見かけたことはあつたが、門内に入つたことは一度もなかつたのである。

當時紅葉は新妻を貰つて、北町から横寺町へ移つた頃で、明治二十四年の五月下旬であつた。

文學青年花袋は、その日はキャラコの黑紋付羽織に小倉の袴を穿いて、長い髪を頭の中央から兩側に分けてゐた。訪問すると玄關の隣の八疊から、庭を眺められる長い廊下を通つて、そこから、二階の廣間に案内された。彼は廊下を通る際、紅葉の妻君の白い横顏と赤い手絡とを見落すことはしなかつたと、後年になつてその當時のことを彼自ら述懷してゐる。

彼は大家紅葉に向つて坐つたことを、この上もなく誇りに思つた。紅葉は外國文學の勉強をしなければならないこと、ゾラの文章の細かく行き渡つてゐること、英國の詩の話、西鶴のことなどについて、彼の爲めに語つてやつて、男らしく少しの城壁も設けず、友人に對す樣に打ちとけた態度をとつた。紅葉はその頃廿七八歳位の年であつた。花袋はこの一躍大家となつた紅葉の幸福な生活や、新婚を祝つた一六居士の幅物や、菊と紅葉の揃ひ模樣の湯呑茶椀や、總て目につくあらゆるものに羨望の目を向けながら、この若き文豪と相座したのである。

其後彼は、紅葉とは種々の交渉を重ねて出入をつゞけてゐたが、或る時、うつかりと紅葉に對して「君！」と言つて呼びかけたのが因で、それ以來は幾度訪ねて行つても門下生の鏡花、秋聲等に命じて、子弟の區別を重んじた紅葉は花袋に玄關拂ひをくはせた。

其の頃彼は牛込に住んで、博文館の編輯所につとめてゐたが、傍ら校正して得た百何十金を受取ると直ちにその足で丸善に出かけて、モーパツサンの英譯全集を買つて來たことがある。とにかく彼も貧乏暮しをしてゐた。

然し明治二十八年前後からは新進作家の列に入ることが出來、山家水、水車小屋、小桃源をつゞいて發表し、その作風のボエチカルなのによつて青年子女に愛讀せられ、彼は文壇の中心に向つて進みつゝあつた。これ等の諸作は片戀、初戀、失戀にからまる事件を材料としてあるもので、後年に及んでも彼の作品にはこの種の、題材の好みがある。

それより前、彼は自然主義の實質的なる先驅者國木田獨歩と親しく交はるにつれて、四十年以後の彼の作風には漸く自然主義の傾向が濃厚となつて來た。即ち「蒲團」である。この作は彼の女弟子をモデルにしたものであつて、作そのものについても讃否の聲高くまたモデルについても種々な噂が起つた。日本の文壇にモデル問題のあつたのはこれが最初のことである。また主人公を「私」とした即ち「私小說」もこれをもつて初めとする。「蒲團」は中年者の熱烈な戀を描いたもので、而も作者の大膽な告白であることが、少なからず文壇の注目を引いた。當時の弟子、今、わが國新聞研究のオーソリチーたる永代靜雄氏

の夫人たる美智子氏は、一時閨秀作家として立つたこともあるが、未だに作者をこのことで批難してゐるといふ。

四十一年には「妻」を發表し、つゞいて「田舍教師」を出し、主張するところのゴンクール一派から出たものといふ平面描寫によつて終始し、島崎藤村、正宗白鳥、德田秋聲と相並び稱せられるに至り、大正九年には擧つて文壇人たちからその誕辰五十年祭を祝はれた。

3 「破戒」の作者島崎藤村

島崎藤村は、信濃の村塾に教師であるかたはら、專ら新體詩をかいて有名であつた。それが、長篇「破戒」を抱いて中央に出づるに及び、文名は一時にあがつた。「破戒」は、少なくともその形式においては全く自然主義の作品で、島村抱月は「我が小說壇に一期を劃するもの、若くは劃せんとしつゝあつた幾多の前驅者を總收して、最も鮮かに新機運の旗を揭げたものとして、予は此の作に滿腔の敬意を捧ぐるに躊躇しない」と云つてゐるが實際この作は新舊文藝のエポックメエキングをなした作である。地方色の鮮かに出てゐること、挿話の多いこと、從來の長編に見るやうな筋の無いことなどは從來のものとは打つて變つた新味を見せてゐた。

彼は信濃の舊家に生れた。父親は、熱情的な志士的氣慨に充ちた人で、國事を憂へて發狂し、悲愴の辭を遺して座敷牢に死んだ、このことは「家」の中にかいてある。彼はこの父親から儒教的教育を受けた、九つの時、十二の兄と一緒で嶮しい山坂を越えて東京へ出た、その時のことは「幼き日」にかいてゐる、それから姉の嫁入り先に寄寓して學問をした、幼い時から親の傍を離れてゐたので、人知れぬ氣兼ねもしたり苦勞もした、「幼き日」の時代から「春」「家」の時代に至るまで、彼は具に世の艱難を嘗めた。明治學院に學んだ青年時代には、北村透谷、戸川秋骨などと共に「文學界」の同人として、常時のロマンチツク、ムーヴメントに參じて、盛にセンチメタリズムを鼓吹した。その頃熱烈な戀をし

た、その戀の顚末は「春」に描かれてゐる。惱みに堪え兼ねては、坊主になつて放浪の旅に出で、相撲の海に身を投じようとまでしながらも、その戀人には手をも觸れなかつた。そして結局は、「默つてお辭儀をしてさうして別れた」。

十二のとき故郷を出た彼は、五十六の今日、その新作「嵐」に、故郷の元の屋敷に家を立てゝ長男を百姓に仕立てゝゐることをしみじみとした調子でかいてゐる。プロ批評家青野季吉は、「自作農の生活を始めた長男に明るい未來を描く父の心を哀れむ」と評してゐるが、いつでも故郷に歸つて行かれる人は、理屈はおいて此の上の幸はないであらう。

4　プロ文學の先驅、小川未明

「どんな人でも、自分の生れた故郷を忘れ得ぬ物である、世界を家とするやうなコスモポリタンでも、又は諸國の景氣を見てその方へと流れて行く流浪者でも、靜かな時、泌々として、その故郷を思はないものはないであらう。私が東京へ來て、文學を志して小說を

書いた時分には、多くはその故郷に對する思慕の情であつた」

彼の作に常に一種の陰鬱さがあるのは、彼の故郷北の國の影響であり、常に幾分のセンチメンタリズムをもつ所は、この思慕ある故であらう。彼は文壇生活二十年、常に、清貧であり乍ら、初一念、いつも所謂「新進作家」の氣持でゐるといふ。その昔、大學時代、ある時、突然、未明は敎壇にたつて、

「僕は、諸君、小說家になるのであります、必ず小說家になるのであります、諸君、わかりましたか、僕は、きつと、小說家になつてみせるのであります。」

と言つたさうである。

果して彼は小說家になつた。

未明は、越後の國、糸魚川の河畔に神主の子として生れた。相馬御風は同鄕の人、而かも幼な友達である、御風が、詩、短歌を作つてゐるに對して、彼は白州と號して漢詩を作つてゐた。

後、東京に遊學、坪内逍遙に師事して、創作を見て貰つてゐたりした。二十三歳の時北國を背景にした處女作を、「新小說」に發表したが、餘り問題にならなかつた。

爾來、一日に一作を書いた程の精進の念に燃えた精力家であつた。當時自然主義の擡頭に對して、今もその作品に見るとほりの彼のネオ、ロマンチシズムは、半ば苦笑をもつて文壇に迎えられた。彼の立場は苦しい孤獨であつた。大學卒業後は、暫く讀賣新聞社の文藝部にゐたが、間もなく退社してしまつた。貧困も、彼の詩人的素質には勝てなかつたのである。彼に文壇の位置を與へたのは「少年の笛」であつた。世評囂然たるものがあつたに對して、獨り小宮豐隆は頭から彼を叩きつけたのである——文壇の常とは言へ、叩かれた小川未明は世評老大家に定つた今日、叩いた小宮豐隆今何處にかある、と、言ひたくもなるであらう。

「白痴」「愚鈍な猫」の作は、彼を今日あらしめた出世作である。當時、彼の幼年の友相馬御風は新進評論家であつた。この友に勵まされたこともまた多大と言はなくてはならない。その頃、「文章世界」で、作家の人氣投票をしたことがある、未明は、實にその第一位を占めてゐた。時も時、さしもの自然主義も文壇からは漸く傾きかけてゐたので、彼は鈴木三重吉などと、ネオ、ロマンチシズムの上に立つて、所謂少年文學を文壇に勃興さした。今日、彼が、童話作家としての第一人者であるの位置は、早くそこに基調を置いてゐるのである。

然し、彼の文壇への貢獻は、と言ふよりも社會への貢獻は、この少年文學にあつたのではない。彼の初期の作品を繰り返して見るがよい、プロレタリアと言ふ文字、ブルヂョアと言ふ文字、乃至インテリゲンチイアと言ふ文字が隨所に見えるであらう、彼の組織した「青鳥會」は、今日の階級文藝爭鬪のもとであつた。この事は、何れから言つても、特筆して當然のことであると思ふ。

5　好漢、江口渙

江口渙は颯爽たる風丰をもつて批評壇に現はれて來た。岩野泡鳴との論戰は今思ひ出しても勇ましい。

泡鳴は例の一元描寫論の解說まで加へて彼を說伏しようとし、彼はまた泡鳴の論旨と一元描寫の不自然とを批難した。そこで泡鳴は彼を小便臭い子供と評し、彼は泡鳴をばかだと評し、文壇の注目を一身に集めた。間もなく泡鳴は病氣のため醫師長與に診察されながら死んで了つたが、やうやく病重くなりかゝつた時、或日、彼の泡鳴論を一讀し、泡鳴は怒りに震ふ手に鋏をもつてその文章を切り裂いた。それほど彼の評は精鋭であり、皮肉であつた。

批評の筆を執る前の彼は、小說家の志望を抱いてゐて、帝國大學英文科中途退學の後、友人佐藤春夫等と共に文藝同人雜誌を發刊し、帝國文學にも作品を發表したが、一般文壇の注目を得ることは出來なかつた。だが、彼の小說家的修養も、文壇生活もこゝに第一歩の發足を印した。

赤木桁平、豐島與志雄、後藤末雄は當時の赤門派の新進作家であつたが、彼がこれ等作家の列に加へられ初めた頃には、彼は友人赤木と共に批評に筆を染めてゐた。彼の素質は未來を矚目されながらも、一般文壇からは注目されない傾きがあつて、作家としての進路を阻まれてゐた。

批評家としての彼は、その精鋭なる論陣と堅實なる筆致とによつて、一躍赤門新進批評家の名を得るに至つた。彼は當時の文壇にネオ・ロマンチシズムの提唱をなし、芥川龍之介、谷崎潤一郎の作品を推奬して止まず、就中、潤一郎の作をば推奬するのあまり、大正十一年以後の文藝は暫く潤一郎時代であらうとまで極論した。それはともかく、彼の提唱したネオ・ロマンチシズムは當時の文壇に對してのよき言葉であり、彼一人の論文が如何に文壇に生氣を與へたことか！

批評家としての名聲を得ると共に、彼は再び創作の筆をとり、深刻なる題材と堅實なる描寫とによつて、新進作家の列にも確實な地位を得、彼は若き作家であり且つ批評家であ

り得た。其後間もなく社會主義同盟が組織されると、彼は小川未明、藤森成吉、秋田雨雀中村吉藏、加藤一夫等と共に、文學者としてこの同盟に參加した。以後彼は決してネオ・ロマンチシズムを口にせず、專ら社會主義的傾向を帶びた作品及び評論を發表した。「勞働者誘拐」「戀と牢獄」等はその代表的なものであつて、總て勞働者階級の人物を題材としてゐる。今日彼の不遇は性來の多病にもよるであらうが、またあまりに淸廉であるがためでもある。けれども彼は氣慨の士である、今後とても決してその態度をかへるやうなことはしないであらう。

6　健筆家加藤武雄

新潮社の雜誌「文章倶樂部」を、今日のやうに、文壇的一種の勢力たらしめたのは、一つに、加藤武雄の編輯ぶりによるものだといふ。彼は、匿名の健筆家であつた。中村武羅夫、西村陽吉、水野仙子、秦豐吉などゝ共に、「文章世界」の第一期の投書家で、加藤冬海と稱してゐた。選者田山花袋の賞讃、投書家中の第一位にあり、西村渚山選の散文にも、また彼は常にその選者の賞讃を受けてゐた。さうしたことが彼に投書の極意を敎へ、今、その投書雜誌の一權威たる「文章倶樂部」を編輯して、萬で數へる程の發行部數を見せてゐるのは、何と言つても、彼の投書家時代の苦心を思はするに足る。彼は小學校を卒業し、後、敎員養成所を出た。

「東京から汽車で二三時間、野の中の小さな停車場から一里ばかりのところに、私の鄕里がある。秩父山彙の相模平野の一角に、立陵となり、村藪となりつゝ次第に消え込まうとするところの、山裾の小さな村に、私の生れた村がある。私は二十三の時までこの小さな村の生れた家に居た。まるで牢獄に居るやうな氣持でそこに居た。東京へ、東京へ——然う思ひあせり乍ら小學校の先生などをしてそこに愚圖愚圖してゐた。鄕里に於ける私は對人關係に於ては一箇のエトランゼエだつた——今だつてさうだ、私は鄕里の人々に對しては、たいして好意をも愛着をも感じる事は出來ない。しかし、私は、鄕里の自然に對し

ては、常に止み難い憧憬に驅られる。」

相模川岸邊の蘆の秋の歌にしらで合はしてわがうたひけむ

こんなまづい歌もある。上京して新潮社へ入社、小林愛川の健筆は誰も知つてゐるであらう、愛川こそ、加藤武雄の匿名であつた。

「出世」といへば、文字どほり、世に出ることであるとすれば、新聞雜誌に名をつらねるほどの作家はすべて「出世」物語をもつてゐる筈である。しかし、幾百の作家を一々ここに紹介し切れるものではない。次に書く「處女作物語」とか、「文壇苦行記」なども、また出世物語の一部だ。

處女作物語

一　一年半持ちあるいた吉田絃二郎

吉田絃二郎が文壇的に處女作として出したものは「早稲田文學」に載せた「磯こよみ」であつた。しかし「磯こよみ」より前に彼は「六合雜誌」に短篇小說を一つと、「老農」「エルサレムの丘」の二つの脚本を書いた。二つとも一幕物である（大正元年から二年ごろ）。またそのころ六百枚ばかりの長篇小說「扉に立ちて」を書いたが、これはどこでも出してくれるところがなかつた。

「扉に立ちて」の後に書いたのが「磯こよみ」で、これは對馬の自然を背景にして、か

つて彼が働いた或る土木工事の生活を材料として取り扱つたものであつた。文壇にほとんど一人の知己も持たなかつた彼は「磯こよみ」を出すについてはずゐぶん困つた。日本橋の或る雜誌社に持つて行つて駄目だつた時などは、丁度日暮であつたが、あの今川橋の上にぽつねんと日がすつかり暮れてしまふまで考へ込んでしまつたといふ。

彼は「磯こよみ」一つを一年半持ち歩いた。

最後に彼は戸塚の諏訪に島村抱月を訪ねて行つて「磯こよみ」を見てくれるやうにと頼んだ。

抱月は快く承諾してくれた。

二三日後彼は本郷から諏訪まで出かけて行つた。その次には一週間ばかり經つてからたづねて見た。彼はたいてい一週間に一度は玄關まで行つた。

「すまないが、忙しいのでまだ見てゐませんよ。」抱月は微笑を洩らしながらいつも同じ言葉をくりかへした。

それからは一ヶ月に一度くらゐ抱月の玄關に立つた。

春が過ぎ、夏が過ぎ、戸塚の抱月の家の周圍には玉蜀黍の葉が秋らしい響きを立てゝゐた。

彼は本郷から戸塚まで幾度往復したか知れない。

秋もだいぶ老けた頃であつた。彼は或る日またいつものやうに諏訪に出かけて行つた。その途中で、早稲田大學の理工科の建物の横あたりであつた、島村抱月がインバネスを着ていつものやうに、懐つこい眼をして下つて來るのに出合つた。

『あゝ、あの原稿を讀みました。面白かつたから早稲田文學に載せるやうに相馬(御風)君に話しときました』と微笑を湛へながら抱月はそのときいつた。

『私の今日までの文壇生活のうち、あの時ほどうれしかつたことはなかつた。實際私は踴り上りたいやうな氣になつた。島村先生に『面白かつた』と言はれたゞけで、もう自分は何だかえらくなつたやうな氣がした』と彼はそのときのことをいつてゐる。

そして、江戸川縁を通つて本郷まで歩いて歸る道々、彼はひとりでに笑ひ出したくなつて仕方がなかつた。

早稲田を卒業するとはたと困つてしまつた。中學の教師になるつもりで、方々頼んで見たが、資格がないので駄目だつた。群馬縣の師範から英語と體操の教師を兼ねて一人教員が欲しい、無資格でもいゝといふことであつたが、田舍にゆくのはいやだつたのでいかなかつた。その頃、福島縣から出て來た男に二ヶ月使はれたが、一文の報酬もくれなかつたので止めた。「六合雜誌」が復活（休刊してゐたのではないが）するについて、來て働いたらどうかといふことで手傳ひに出かけて行つた。彼は毎月東京中の講演を聽いてまはつて、それを纏めては「六合雜誌」に載せるのであつた。「六合雜誌」の編輯は約五年續けた。彼の「磯こよみ」はその時代に書かれたものであつた。「磯こよみ」が「早稲田文學」に發表された時はその月には彼の作については批評するものはなかつた。翌月の「帝國文學」に山田檳榔がたゞ一人短評をしただけであつた。

二　「修道院の秋」を書いた頃

大正五年九月十七日のちやうど午後二時に間近い頃だつた。その少し前に修道院の門を出たばかりの私は來る時の船で偶然道連れになつたKさんと、まだ小一時間程もある歸りの船の時刻を待ちながら、當別岬崖の草地に腰を降して、うつすりと靄のかゝつた津輕海峽の沖合をぼんやり眺めてゐた。想像には描いてゐたが初めて眼のあたりに接した修道院の空氣と、そこに籠つた幾十人かの修道士達の生活と、それは私の胸には大きな感激だつた。二人の間には暫く詞もなかつた。Kさんも考へこんでゐた。私も考へこんでゐた。

私は若かつた、感じ易かつた、世間知らずだつた。私は子供の時分から色々な病氣に苦しみ、きたない慾望に責められてゐる體と、自分の才能の不安や、自分の持つ色々な虚僞の苛責や、自分の周圍への不滿や、行手の迷ひなどに始終かき亂されてゐる心を持つてゐた。さう云ふ私の前に、雄々しい程に世間を斷ち切つてゐる修道院の靜に澄んだ空氣と、

世の中のあらゆる歡樂を却け、人間のあらゆる慾望を捨てゝ、心と體のすべてを神に捧げ死後の永遠の生命を信じて、それを完全にしようために現實の自分の體や心を極端な程に鞭打つてゐる修道士達の徹底した生活とは、どんなに深く大きく響い事だつたらう？　あんなにまで鞭打たなければならない程人間はきたないものだらうか？　あんなにまで世の中と斷ち切つて生きる事が人間のほんとの生き方だらうか？　いや、それよりも、一體死後に永遠の生命などがあるものだらうか？　一方さう云ふ疑ひを抱かせられながらも、私は修道院の深く靜に澄んだ空氣に惹きつけられ、自分の信仰に敬虔忠實な修道士達のきつぱりした、眞純な生活には心の底から動かされた。そして、その感激は、秋の深い北海道の自然の蕭條とした姿と共に、函館へ歸り、更に東京へ歸つた後も、私の胸に深く殘つてゐた。

私はちやうどその時慶應義塾の文科生だつた。卒業を翌春にひかへて私は前にも書いたやうに自分の才能に不安を感じたり、行手に色々な迷ひを持つてゐた。無論、私はどんな苦しみ、どんな困難を忍んでも、生涯を創作家として生きようと決心してゐた。が、創作には、と云ふよりも創作に就いての自分の力には、努力すればと云ふ氣はあつたが、全く自信が持てなかつた。小說などどう書いたら好いものか、ほとんどあてがつかなかつた。が、とに角卒業は迫つて來た。來年は二十五だ。トルストイは二十四で處女作「幼年時代」を書いた。いや、手近の日本でも誰彼は幾つで處女作を書いた。そんな事を考へると、私は寂しくなり、あせり、また興奮した。

處で、この頃の文科の人達は二十一二で小說らしい小說を書いたり、器用に同人雜誌などをこしらへたりするが、私はそれまでに小說などを書かうとして筆を持つたりした事は一度もなかつた。いや持てないのだつた。まして自分の書いたものを活字化しようなどは始ど夢想に近かつた。然し、その頃衰境にあつた「三田文學」の先輩の間に若い人達を迎へようとする議も起つて、一種の機運は向いてゐた。井汲清治や小島政二郎などと東京の町中をぐるぐる歩き廻りながら、處女作發表の事で興奮し合つたのもその頃だつた。然し

二人は小説の事でも知識が深く腕もまさつて見えたので、私は密に羨んだり、あせつたりしたのも事實だつた。

同じ年の春の初め頃からだつた。私は「雪消の日まで」と題し、信州の或る湖畔を背景にし、そこに狂人の母と共に過す私の或る友人の生活を中心にし、前年の早春そこに訪ねてその生活を共にした時の自分の氣持なり觀察なりを交へて一つの長篇作を構想し始めた。先づノオトに可成りこまかくプランを立てた後、そろそろ筆をとり出した。が、不滿に不滿、失望に失望を重ねて苛立ち苦しみ、原稿紙を破り裂くばかりで、一枚も出來上らず、二月程して全く筆を投げた。八月になつてから妹夫婦が北海道苫小牧にゐるをしほに旅出した。そして、九月なかば近くまでの苫小牧滯在の一月間に「雪消の日まで」を脱稿しようとした。

處女作の筆の動かぬ寂しさを誰に傳へん聞く人もなし
一字書いては吐息をつきて涙ぐむ處女作の筆秋の風吹く

その夏の日記にそんな歌を書きこんである。歌が暗示する通りたうとう「雪消の日まで」は出來上らなかつた。私は苫小牧の海岸程寂しい海岸を知らない。すべてが灰色で憂鬱で土地の人が「濱なし」と呼んでゐるちよつとアネモネのやうな感じのする眞赤な小花が處々の砂丘に咲いてゐるのも一そう寂しい感じがする。私はその砂丘の上に足を投げ出し索漠たる大洋の沖をぼんやり眺めながら、その頃好きだつた啄木の歌を心ゆりに口ずさんでは涙ぐんだ。そして、私は寂しい氣持で苫小牧をあとにしたのだつた。

苫小牧から札幌、函館に廻り、修道院を訪ねて東京へ歸り着いたのは九月の二十日だつた。修道院の感激は私の氣持を始終深く支配してゐた。そして、その感激をそのまゝに書いてみたくなつた。で、旅氣分の落ち着くのも待たずに「修道院の秋」と題して一種の眞純な興奮と共に筆を取り始めたのは、二十三日の夜からだつた。が、筆はやつぱり思ふ通りには動かなかつた。それに東京の秋はいつものやうに私の體にたたつて、夜更かしの無理やなんかと一緒に持病喘息の發作が毎日續いた。少しの誇張もなく、私は喘ぎながら書

いた。不安や迷ひや失望が一そう私を苦しめた。ほんとにどれ程原稿紙を破り捨てた事だつたか？　が、一先づ三十七枚かにまとめ上げた後、私はそれをまた三四度書き直した。そして、「三田文學」十一月號の締切に間に合せるために編輯主任だつた井川滋さんの赤坂簞笥町の家まで屆けに行つたのは、十月十七日の夕方だつた。その道々の深い歡びと同時に深い心もとなさと！

その十一月號が山崎俊夫さんの「雛僧」と云ふ小説で發賣禁止になつた時の失望、脱稿後伊豆の湯ヶ原溫泉に轉地して小宮豐隆、澤木梢の兩先生と、井汲清治、小島政二郎から賞め手紙を貰ひ、歐洲から歸つたばかりの水上瀧太郎さんと偶然同宿して短い詞ながら賞めて貰つた時の嬉しさ。それから世間には「時事新報」文藝欄の六號で二行ばかりの好評を讀んだ時の快い微笑。それは別に處女作と云ふ積りでもなく書きながら結局私の處女作になつた「修道院の秋」の後日譚である。小さい、貧しい作品ながら私は未だに外のどの作品にもまさる深い愛懷を感じてゐる。（―南部修太郎）

三　「三等船客」の素性、骨柄

「三等船客」の話をしませう。あれは今保存してありませんが、一冊の小型なノートを手控へて、天洋丸の三等船室で、念入りに、船客の一人一人、雰圍氣の變動、自分のムードなどを書き込んでゐたものを、極度に壓搾し蒸溜して作つたものでした。枚數にすると九十枚そこ〳〵でしたが、私は文壇への「名刺代り」といふ意味で發表したのでした。

もと〳〵、主人公といふ中軸を認めない小説を書いてみようといふ試みだつたので、篇中どの人間へ力を入れたといふでもなかつた筈ですが、どことなくシテやワキなどが出來てしまつたのは、私の下手なためだといまでも齒痒く思つては居ります。人は、あの篇中に賭博の光景が描いてあるのを、中心點だと思つたり、「どの船にも必らず一人はゐる」女のことを書いてあるので、そこへ視線を凝集したりしますが、私としてはさまざまな群人が、汚らしい、悲慘な現實に共棲して、一團の小社人として生きてゐるうちにも、「日本」

へ近づくといふ、大きい希望の爲めにいつとなく心理的に變化して行く、といふことを書いたつもりです。六七回、書きなほしたと記憶します。――もうすこし經つたなら、私としても、あゝいふ群集心理を、無理をせずにこなして行けさうにも思はれます。まだ、四十歳には間のある體でもありますからな。

發表當時のメリュウの方が、「三等船客」より、まだ〳〵面白い。といふのは、あれは、復興期の「中外」の第二號へ、宮地君か確かの作といつしよ載つたものですが、あれが出た頃、私は「中外」社の社長内藤民治氏へ書留で辭表を出したきり、社へは出なかつたのでした。いくら社員の人々が、勸誘に來ても、私は内藤氏の態度に慊らずとして、家に引込んで、ラッセルの「ボルシエヴイキ論」を譯してゐたのです。その後、内藤氏も、どんなに借財に苦るしい中を、襟度正しく、うろたへずに生きてゐたかゞわかり、尠くとも、その愚痴一つこぼさなかつた男に惚れて今も猶友人として眤懇して居りますが、その當時の社「内外」は亂脈を極めたものであつたのです。

發表するにしても、雜誌の廣告も出ず、賣行も思はしくなかつたらしく、友人山崎斌君の批評や、誰かが送つてくれた（たしか松本淳三君と思ふ）「やまと」の批評、それから伊福部隆輝君等の「國民」やらの批評を見ただけです。山崎君は「よみうり」で二日間、あれに就て語つてくれた。それから、文壇で惚れつぽいと噂のある好人物内藤辰雄君が、雜誌をもつて行つて、「三等船客」のうしろへ、『初見の彼の怒りをも顧みず』落書すると稱して、

『あなたを有することによつて、日本人が蘇生することを、私は信じます。内藤辰雄』

と、鉛筆で落書して返へしました。

が、それらの文壇事よりも、私にとつて深い追懐の種となつてゐることは、あの小説の複數主人公たる、生きた移民の人達です。

忘られない。さうだ、二月九日の夜であつた。私達は、例の横濱の埠頭へどやゞつと雪崩れ落ちると、その晩は、今は燒けはてゝ跡方もない、遠州屋とか上州屋とかいふ旅客

對手の宿屋へ一泊し、翌る日には、皆ちりぢりに、日本國中へ散じてしまつたのです。九州「バッテン」のモデルになつた女もありました。講談本を讀んでゐた男、(實際はそんなものを讀んでゐなかつたのだが、何となくそんな氣がしたのであゝやつたのです)隻眼の男、賭博に負けた青年、鼻歌を歌ふ若い者、——彼等と同じ宿に一泊したとき、私はどんなに日本の座布團の上で、懷石膳で飲んだ酒に、土着の傳習をなつかしんだか。醉ふて、メリケン語まじりのくだを捲いた、親切な男の顏も記憶してゐる。悠ぇ悠えた性の慾望をその晩七人の同宿者は、どこかの遊廓で解放して、『藝者が附いて百弗』は安すい、と云ひながら、明け方どや〳〵と歸へつて來たのも、まだ耳の底に殘つてゐる。翌る朝の好奇心に充ちた散歩——それは久しく故國の地べたを踏んだことのない人間の、しんから感ずるノスタルジアでなくて何だらう。私は、ひとりでいくども同じ點頭してゐるやうな家並の間を、小旗、のぼり、看板、馬鹿囃、小兒達のなかを、半日ぐる〳〵廻つてあるいて、免囚になつた罪人のやうな自由を味はつたものでありました。そして、その日のうちに、宿からは「三等船客」の群は、一人づつ、誰知らぬ間に、どこかへ消えて行つたのです。

それから四ヶ月もたつてからだらうか、私が、前のノートを出してみて、「中外」へつとめつゝある間、毎晩十二時頃まで、コツ〳〵「三等船客」の稿を書きはじめたのは。最初は、「三等船室」とするつもりだつたのですが、どうも『室』といふ固乾した木質の感じしかしないので、『客』としました。發表後、第二、第三作を「國本」「表現」へ出して、しまひに、自然社から、新作二篇を添へて、同じ題の短篇集としたのでした。『三等船客』の會、神田の今文だつたらうと思つてゐるが、二組三組のナイーヴな、騷々しい喧嘩があつたので、同店ではもうブロは御免だ、と云つてゐたさうだ。ともかく、こんなことで、それからそれへと、私の處女作は、妙に浮世にひつからまつて來たのでした。書いた當人が、私生兒であつたとほり、「三等船客」も、發表されたときは私生兒であつた。そして、又、私生兒なみにちよつとした苦勞もしました。

かう書いて來て、今、思ひ當るのは、あれを原稿のまゝで見て、どうやら讃辭らしいも

のを云つてくれたのは、友人安成貞雄であつた。

宮地嘉六君も、「新潮」で言葉を惜まずに好評をやつてくれた。以上、列記した人々に對して、私の處女作『三等船客』は、心から感謝してゐるのです。（―前田河廣一郎）

作家印象記

一　武藏野の只中の家

子供にきく

一月十日の日曜日の午後、冷たい風が大武藏野をヒユウ〳〵と吹き通つてゐました。空は無氣味なほど底深く晴れ渡つて、まだ開墾されたまゝの荒い道路は、泥土の跡を刻んでカチ〳〵に凍てついてゐました。

「ちよつとおたづねしますが、上井草千四百七十番は、どの邊でせう。」

省線西荻窪の驛を降りて約六七丁、疎らに散らばつた住宅のとある一軒で訊くと、緣側

から顔を出したお爺さんが仔細らしく首をひねりました。

「さあこゝは五十九番だが、何にしろこの邊は家が少いから。」

すると丁度そこへ學校が退けたものか、鞄を肩にした二三年生らしい一人の可愛い子供が歸つて來ました。

「誰れのお家？」

「中村さんといふの。君知らない」

「あゝ中村君の家か、向うの道の角に見える黒い洋館がさうだよ。」

私は思はず微笑しました。家のわからない時には子供に訊くに限る。子供は對手が八百屋の子供であらうが大臣の子供であらうが、皆仲のいゝ友達である。などゝ思ふと何となく心が愉快にされるのでした。

色の褪せた赤い屋根、焦茶色のニス塗板を張つた外廓、無雜作に數本の雜木を植ゑたさやかな庭、それをめぐる低い芝山の垣。最新流行の文化住宅といふのには少々色彩の乏しい感じ。

「御免下さい。」

玄關の硝子戸をがらりと開けると、壁際に太いステッキが立てかけられてあり、革の鼻緒の駒下駄の低いのが斜に脱ぎ捨ての儘になつてゐて、家の主人が、散歩か何かゝら歸つて來たばかりといつた風なことを物語つてゐるやうであります。

「御免下さい。」

返事がないので私は重ねて呼びました。

するとドカ〳〵と階段を下る足音がしたかと思ふと、眼の前の障子が開きました。

「どなたですか。」

顔を出されたのは、まさしく講演會や寫眞などで見覺えのある巴の黒い、チョッピリと

口髭を蓄へた中村星湖氏自身であります。

「かういふものです。ちよつとお目にかゝりたいのですが……」

私はいんぎんに頭を低くして一葉の名刺を出しました。

「あゝさうですか。」

「ホンの五分か十分ばかりで結構なのでございますが。」

仕事か何かの都合で、玄關拂ひをくらはされてはならないと思つたので、私は矢つぎ早やに續けました。

「散らかしてゐますが、どうぞお上りください。」

朴訥とでもいつた感じのする態度が、たまらなく好感をそゝりました。

「それはこちらです。」

脱いだマントをどこに置かうかと迷つてゐると、星湖氏はかういつて自ら取つて玄關の間の壁際に掛けてくれた。

「これはどうも。」

私はひどく面喰つてしまひました。

自分で壁を張る

通されたのは二階の應接室であります。三方が玻璃窓になつて、その明るさつたらありません。寒中だといふのに窓を透して射し込む日の光に、部屋の中は宛ら晩春初夏の如き溫度を示してゐます。

「さあおかけ下さい。」

「は、有難うございます。」

星湖氏の掛けられるのをまつて私もすゝめられた籐椅子に腰をおろしました。中にした三本脚の圓卓の上には淺く砂埃がたまつてをり、中央に置かれた瓶さしの南天の枝には赤々と實が垂れ下がつてゐます。

「實に見晴らしがようございますね。」
「えゝ、併し段々家が増えて行くので、今二三年もすれば向うに見える森なんか、すつかりかくれてしまひますよ。」
「生麥の方からここにお移りになつたのは、いつ頃でした。」
「十三年の秋ですから、もう一年半位になるわけですね。」
「やはり分譲地か何かを、お買ひになつたのですか。」
「土地などを買ふ金があるものですか。地面は借りてゐるのですよ。どうせ敷金の五ッも六ッも取られるならと思つて建てたのですからこの通り粗末なものです。」
「でも割合に風などにはしつかりしてゐるやうではありませんか。」
「駄目ですよ。地震などにはとりわけ敏感な方です。」
そこへ女中さんが、お茶とお菓子を乗せた盆を持つて來て圓卓の上に置きました。するとその拍子に、卓はゴッ〳〵と揺れました。

「この通りなんです。別に脚はビッコでも何でもないのですが、後から追つぎをしたほどで、どうもこの床の張りがよくないのです。そんな二重なことをしては却つて損ぢやないかと笑ふ人もありますが、一錢から借金して建てた家ですから、壁なども紙を買つて來て自分ではつたやうな始末だつたのです。」
なるほどな、と私は思はず込み上つて來る苦笑を嚙殺しました。さうきけば先刻玄關に待つてゐた時、黑地に銀砂をまき散らした壁が、餘りに精巧で綺麗だつたので何氣なくそつと指を觸れて見たのでしたが、どうもその時の手觸りが頗る變であつたことを思ひ出したからであります。
自分でコッ〳〵と家の壁紙を張る——何でもないやうだが、そこにいかにも星湖氏らしい質實な性格の一面が窺はれるやうな氣がして、中々面白いではありませんか。

中村星湖氏といへば年少既に文壇に出で、後かの「文章世界」やその他の文藝雜誌などに關係して、長い間後進の誘導に努めて來た人であり、今日文壇にさくさくの名聲を馳せてゐる作家で、曾て無名の投書家として直接間接に氏の世話になつた人の少くないことは讀者も既に御承知のことゝ思ひます。

「昔――といつても先生が長い間選者などをしてゐられた間には、既にその將來を囑望されたやうな人も少くはなかつたことゝ思ひますが、さういふ人はやはり後に至つて文壇にも出られたでせうね。」

「さうですね。境遇や何かの事情で一概にはいはれませんが、横光利一君、悅田喜和雄君などは中々優秀な投書家でしたよ。」

「横光氏などはやはりその頃からいはゆる新感覺主義的な作品を書いてゐられたのでせうか。」

「表現技巧などは中々氣が利いてゐました。さういふ點では當時の新進作家などにも決して遜色がなかつた。たゞ內容は表現に伴はないといふ憾はありましたが。しかし横光君に對してはその頃から僕は作家として尊敬してゐました。今でも敬意はもつてゐますよ。」

「昨年だつたか新聞か何かで、横光氏と何か論爭をやつてゐられたやうでしたが。」

「どうも僕には新感覺派などゝいふのが、徒らにわからない怪奇な文字を羅列して喜ぶものだとすれば、贊成することが出來ないのです。さういふものは、やはり非を非として爭はねばなりませんからね。」

「これは横光氏とは別に關係のないことですが、以前投書家なら投書家として、あなたのお世話になつた人で、今でも、その恩誼に深く感じてゐるやうな人はありますか。」

「別にこれといふ世話などしたといふやうなこともありませんが。」

「然し假りにですね、投書などをしてゐる間にあなたに認められて文壇に出る機緣を與へられた、さういふ人は少くはないと思ひますが。」

「さうですね。さういふ人ならあるでせう。併し恩誼などゝいふのは結局個々の主觀の

問題で、生仲こちらで世話などをしたゝめ、却つてその人の伸長の妨げになつたりしたやうなこともないとはいへませんからね。恩誼どころか迷惑を感じてゐるやうな人もないではないでせう。さういふことは要するにやはりその人の問題ですね。」

文壇の人は由來割合に私的情誼に薄い傾きがあるといはれてゐます。星湖氏の僞らざる告白に似たこの話をさびしいと感じたのは、ひとり私のみでせうか。

意外の影響

「さうだ、ちよつと面白い話を思ひ出しましたよ。」

膝をついて籐椅子にもたれかゝつてゐられた星湖氏は、かういつて身體を前に乘り出されました。私も何事だらうと耳をそばだてました。

「今の機緣だとか影響だとかいふことに關したことですが、最近新進作家として認められて來た川崎長太郎君が、いつだつたか「文章倶樂部」に書いてゐたものを讀んでちよつと考へさせられた事がありましたよ。」

「どんなことが書いてあつたのです。」

「川崎君は小田原の魚屋の息子さんださうですが、何でも中學校に通つてゐる頃からひどく文學が好きで、閑をぬすんでは圖書館に行つて頻りに文學に關する本を讀んでゐたのですね。」

「はあ。」

「ところが僕の書いた文章論がひどく同君の氣に入つて、始めの間は何でもせつせと筆記したものださうだが、しまひにはそれも面倒になつたと見えて到頭その部分だけ本から引裂いて盜んで來たのださうです。」

「それは何といふ本です。」

「島村抱月君が編したもので、隆文館から出た文學辭典といふ本ですが……たゞそれだけならいゝのですが、そのことが暴露した結果同君は竟に學校から放逐されたり、親戚の

嘆きを買つたりしたのださうですが、自分では全然知らない間に、どんなものがどういふところでいろ〳〵の人に、どんな影響を與へてゐるかも知れないと思ふと變な氣持に打たれましたよ。川崎君の場合の如きは一つの禍を與へたやうなものですからね。」

「なるほど、そんなことがあつたのですか。」

私は最近とみに擡頭して來た川崎氏の現在を思つて、聊か感慨なきを得ませんでした。

「然し川崎氏も、今日ではどうやらその思ひが屆いたわけですね。」

「さういへばさうですね。」

星湖氏は再び椅子に背をもたせましたちよつとした。沈默が主客の間を支配しました。心持ち首を斜に傾げた星湖氏の頭の中には、果していかなる考へが徂徠してゐるのでありませう。

氏と農民文學

陽が大分傾いて、階下の方からお子さん達の賑かな聲がした。

「いつだつたか、甲州のある富豪をモデルにした、あなたの短篇を拜見して、ひどく打たれたことを覺えてゐますが、今後もやはりあゝいつた農民文學をお書きになるお考へでせうか。」

「あゝいつたものならこれまでも書いて來ましたが、農民文學といふものはもつと盛になつてもいゝと思ひますね。」

「この頃いろ〳〵の人によつて、農民文學に關する議論が叫ばれてゐるやうですし、また作品もボツ〳〵と現はれて來たやうではありませんか。」

「ところが中に農村を小都會的に扱つたものがどうも多いやうですね。一頃のプロレタリア文學などの中にも、體驗を重ずることはいゝのですが、眞に工場なら工場の中から生れたやうなものは少なかつたですね。同じやうな意味でもつと眞の農村の中から生れたやうなものが現はれなくてはならぬと思ふのですが。……むろん僕等の唱へる農民文學は、

やはり無產階級文學の中での農民文學であることはいふまでもありません。」
「それに就て何か運動を起すといふやうな計畫でもございますか。」
「宣傳といふことも必要ですが、今さら仰々しく旗擧げをしようといふ考へもありません。たゞ同じ考へをもつてゐる者同志、毎月一回研究的な會をやつてゐます。」
「どんな人々がお集りですか。」
「吉江喬松君、加藤武雄君その他平林初之輔君なども見えます。」
「機關雜誌などをお出しになるといふやうなことは？」
「追々やりたいと思つてゐます。」
眞實にして力强い農民文學は、今や時代の要望してやまないところであります。雌伏數年の星湖氏が、いかにも氏にふさはしいこの好個の題目をとらへて、捲土重來の活躍を希望するものは、豈ひとり私のみならんやであります。

まだ何だかいろ〳〵聞き足りないやうな氣がしてゐましたが、丁度そこへ來客が見えたので、それを機會に別れを告げると、
「まだいゝですよ。」
と氏は氣の毒さうな顏をしながら、玄關まで見送つて呉れました。
「ほんとに突然お伺ひして失禮致しました。」
「ついでがあつたらまたどうぞ。」
「は、ありがたうございます。」
かしこまつて外へ出た私は、數歩にして何氣なくあとを振り返つて見ると、先刻は氣にもとまらなかつた木の表札の文字が不思議と私の視覺を强くひきつけました。それは、「中村將爲」と幾らか肩を怒らしたやうな星湖氏の本名を記した楷書の筆跡が實實にしてどこかに野趣を漂はした、やゝ村夫子然たる氏の風貌を聯想せしめられたからでありました。
（―白雲居）

二　私の見た作家

私が最初芥川氏に逢つたのは大正七年の一月の末頃と覺えてゐます。

その頃芥川氏は横須賀で海軍機關學校の英語の先生をしてゐました。大本教で名高い淺野和三郎氏の後へ英語の先生として赴任したのです。そして、汐入町の尾鷲と云ふ石の塀を廻した、大きな家の二階に下宿してゐました。この家は先年の震災で、綺麗に倒潰しました。芥川氏は英語の先生として埋れてゐたなら、昨年の震災で死んだかも知れません。私の家は職工達の棲んでゐる山の手で、芥川氏の下宿は下町の通りでした。私の家から芥川氏の下宿まで二三町しかありませんでした。そんな風だつたから私は時々芥川氏の下宿を訪ねて、勉強のお邪魔しました。

最初私の訪ねたのは、雪か霰でも降つて來さうな寒い暗い晩でした。私は雅號で刷つた名刺を取次の女中に出すと、私の姓名を知つてゐると云つて、芥川氏はわざ〳〵二階を降

りて來て、私を二階に導いて心よく逢つてくれました。

そして、私が文章世界に發表した『紅梅の咲く頃』と『富良野川邊の或村』を、「ありや君全く好い作だつたね、僕には迚も書けない。」と座に着くとすぐ賞めてくれました。

私は芥川氏に逢つて驚いたのは私の想像より芥川氏は若年であつたからです。英語の先生でもする人なら三十歳位にはなるだらうと思つて私は訪ねたのでした。

處が、逢つて見ると却つて教へ子の機關學校の生徒の方は、體格が大きく日に焦げてゐるせゐか、芥川氏よりは年上のやうに思はれるのでした。

芥川氏の顏が餘り若かつたので「あなたは幾つになります？」私は訊きました。

「二十六。」

「ぢや、私より二つ年下ですね。」

「君も年の割に若く見えるね。」と芥川氏は笑つて云ふのでした。

その晩、芥川氏の處へ若い海軍士官が英語を敎はりに來てゐました。私が行つてから芥

川氏は士官に碌々話さないので士官は嫌な顏をしてゐました。士官に取つては私が悪い闖入者でした。士官は私が行つてから間もなく歸りました。

芥川氏と私は士官が歸つてから遲くまで蒸菓子を嚙り乍ら話合ひました。重に文藝上の話でした。

「軍人はどうも頭が單純で話しても面白くないよ。」かう云つた後で「僕は學生時代にロマンローランのジャンクリストフを讀んで餘り面白かつたもんだから學校を休んで讀んだことがあるよ。全く偉大な本だ。讀んで見給へ。」その晩芥川氏はかう云つたことを私は今でもよく覺えてゐます。

その後、私は機關學校へも二三度訪ねて行つたことがあります。それは大抵晝の休憩時間でした。今は震災で、あの立派な機關學校も校庭の櫻樹も殆んど燒けて往時の偉はありませんが、その頃は校庭から海岸まで並木のやうに生えてゐました。

二人は櫻の木蔭や戰利品の大砲の鐵柵の周圍を漫歩し乍ら話合ひました。そんな時、芥川氏はいつもヅボンに兩手を深く入れて、打向き加減に歩き乍ら話すのでした。芥川氏はいつも黑いネクタイを螺結にしてゐました。

頭髪を長くした、併し手入のしない、いつももぢ〳〵した頭や、痩身鶴のやうな芥川氏のさうしたスタイルは何となく私には或る外國の作家のやうな印象を與へました。

大正七年の夏からずつと私は芥川氏に逢はなかつたのです。處が、偶然にも逢ふ機會が來ました。

それは昨年五月のある日でした。私は信濃毎日新聞の東京支局を田端にたづねた歸り途ふと芥川氏も田端の高臺に棲んでゐることを思ひ出しました。そして、芥川氏を訪ねて見ようと思ひました。併し、唯だ芥川氏は田端の高臺に棲んでゐることだけ知つて番地が解らなかつたのです。

私は信毎支局社の門前で思案にくれてゐると丁度折りよくそこへ郵便配達夫が路次から

出て來たのです。

「芥川さんの家は何の邊でせう。」と私は郵便屋に訊きました。

「芥川さんの家ですか、この向うの突當りに門のある家です。」年取つた郵便屋は叮嚀に教へてくれました。

で、私はこの附近でなかつたなら止さうと思つたが、思つたより近くだつたので、私は久振りで芥川氏を訪ねる氣になりました。私は名刺を取次の若い書生に出すとすぐに二階に通されました。

「ヤア、久振だね、君と逢つてから今年で何年になるね。」挨拶をそこ〳〵にして芥川氏はかう云ふのでした。

「大正七年に逢つたですから今年で七年になりますよ。」

「そんなになるかね、早いもんだね、横須賀もずゐぶん變つたらうね」

「あなたの下宿してゐた尾鷲の家はぺちやんこになりましたよ。」

「ええ、それから尾張屋と云ふ料理店があつたね、あの家へよく宴會で行つたもんだ。」

「あの家は倒潰れてすつかり燒けましたよ。」

「ぢや、地震は東京より强かつたんだね。」

「さうですとも。」

「うん、あの機關學校も燒けたかね。」芥川氏は怪訝さうに云ふのでした。

「機關學校は一番早く燒けましたよ。」

「ええ、さうかね。」

その部屋には古書や英文書やその他、我々には解らないいろ〳〵な書籍が、室内一杯に堆積してありました。最高學府を卒へた上、尙こんなに書籍を讀破してゐるのに、私はそれに反して僅々三四十冊の雜誌を讀んだばかりで小說を書くと云ふのは小生意氣だと思はずにゐられませんでした。そして、體驗でばかりいつまでも小說を書いてゐられない。屹度行詰つて了ふ、どうしても芥川氏のやうに讀書から材料を得なければいけないと、私は

芥川氏の書齋を見乍ら沁々とさう思ひました。

私は一見して芥川氏の餘りに年取つたのに驚きました。尤も始終逢つてゐるとさうでもないが、久振りに逢つたからです。芥川氏も私の顏を見てさう思つたに違ひありません。

で、私は「お互に年取りましたね。」と云ふと、

「うん、だが、藝術家はこれからだよ。日本の作家は早く老いぼれて仕方がない。外國の作家は皆五十以上になつてから好いものを書く。」芥川氏は髪の毛を五月蠅さうに左手で掻き上げ乍ら云ふのでした。

七年前に逢つたとき白面の青年だつた芥川氏は髯顏の壯年になつてゐました。七年前に外國の作家のやうな印象を與へた芥川氏は今は俳壇の宗匠の樣な印象を私に與へました。

何故と云ふに芥川氏はかなり暖かい日でありましたが、毛絲のジャケツを着て、併し、羽織を脱いで、前垂を掛けてゐる風丰はどう見ても宗匠としか見えませんでした。

併し、これは書齋での印象で、或るひは洋服を着て、洋杖でも提げて歩くスタイルは以

前にも增して、外國の作家のやうな印象を與へたかも知りませんが、私はその後まだ一度も芥川氏に逢ひません。だが、私は外國の作家のやうに氣取つたスタイルよりは却つてかうした日本的の宗匠の風丰を推奬します。

以前の芥川氏はいくらか衒ふ氣もあつたが今の芥川氏は些の衒ふ氣分もなく、すべてを達觀した宗匠のやうにおつとりと話すのでした。芥川氏は俳句が上手だと私は聞いてゐます。それで芥川氏は自づと宗匠のやうなスタイルが備つたのかも知れません。

二人は殆んど三時間餘り打通して話しました。重に世間的の話でした。

今、私はその時の話を殆んど忘れたが、次の會話だけはよく覺えてます。

「あなたは不眠症でカルモチンを常藥にしてゐるさうですがどんなもんです。私も不眠症で困つてゐます。いゝ工夫はないでせうかね」私はかう訊くと、

「僕はいろ〳〵な睡眠藥を飲んだが矢張り駄目だね、この頃かう云ふことを發見したよ。何んでも疲れ切つて眠むるまで我慢するんだね。それが一番好いよ。君もさうし給へ。併

しこれは勤め人には出來ないね。」

「ジャアルとか云ふ睡眠藥はどうです。」と私は訊くと、

「ありや君、ほんたうの麻睡藥だよ。政府でよく許可してゐると思ふ。あの藥なら一錠飲めばすぐ眠つてしまふよ。だが、次の日頭が重い。矢張り何にも飲まない方が一番好いよ。」（一HK生）

文壇盛衰記

文壇といふ所、丁度政界に似て波瀾重疊、榮枯盛衰、また仔細に觀察すれば、その消長のあと、宛ら往時の源平盛衰記を見るがやうである。即ちこゝに青海波といふ匿名をかつて或る文壇の消息通が某誌に發表した「文壇暗流誌」中より一部を拔いて見る。

一　白樺の卷

「白樺」も今は失くなつて、その後身とも言ふ可き雜誌「不二」が、舊「白樺」の同人數氏によつて生れたが、どうも以前の「白樺」程華々しい評判を文壇に贏ち得ないのは、恐らく時代が「白樺」の人々を離れたからであらう。華々しいと言へば、確かに「白樺」

が嘗て文壇に見せた姿は華々しいものであつた。長い間、自然主義の毒氣に蝕まれて生色の無くなつてゐた文壇に、「白樺」一派の人々が濺ぎ入れた一陣の清風は誠に爽やかなものがあつた。自由な、暢々した、生命に充ちたものを文壇に生かして見せた「白樺」の功績を恐らく今日否定する人はないであらう。否定どころか、現在の文壇は大なり小なり、「白樺」の影響を受けて展けて來たものと見る可きであらう。事實「白樺」は立派な作家を澤山生み出したが、就中、志賀直哉、武者小路實篤、長與善郎、里見弴、有島生馬、犬養健、近藤經一等は、文壇に押しも押されもしない地位を占めた。死んだ有島武郎も「白樺」が生んだ作家であるが、生きてゐたら勿論今日も文壇に活躍してゐることであらう。

「白樺」の同人は美しい友誼に深く結ばれ、互に琢磨勉勵し合ひつゝ作家の道を歩いて來たと、まあ一般に思はれてゐるやうである。事實、武者小路の弟子格とも言ふ可き、第二高等學校を經て大學に入つた近藤經一を除いて、其他の人々は學習院以來の親友の間柄で、その友誼が「白樺」を生んだのだと見て差支へない。ところがその美しい友誼と稱せられる「白樺」にも絶交事件やら感情の衝突やらがあるから、甚だ世の中は面白い。然もその絶交事件の主人公が、今日文壇の大立物ともいふ可き里見弴と志賀直哉だから一層面白い。二人の絶交は七八年も續いてゐたやうであるが、最近有島生馬や武者小路實篤の斡旋で和解したのは先づ先づ目出度いが、一體二人は如何して絶交したのか。それを語ることによつて、一つ「白樺」の暗流を書いて見よう。此處で一寸斷はつて置くが筆者はただ面白半分の氣持から、此の暗流記を書くのではない。ただの面白半分の氣持で、人間の暗い方面をのみ掘り起すやうな仕業は紳士の爲すを恥づ可き事柄である。筆者も老いて文壇を落伍したとは言へ、未だ紳士の禮儀を自ら失つてゐる者ではない以上、どうしてただ面白半分で斯うした暗流記を書かうぞや、である。筆者が此の暗流記を書く所以は、後世の文學史家をして、その日本文學史を編む際の隱れたる史實を供せんための眞面目なる念願からである。讀者、幸に之を諒されよ。

さて里見弴と志賀直哉との絶交問題であるが、元々、學習院時代から二人は非常な親し

い仲であつた。最初、志賀は里見の友人と言ふよりも、里見の兄有島生馬と親しい間柄であつたが、屢々有島生馬と相往來してゐるうちに自然に生馬の弟である里見とも親しくなつたのである。里見は志賀よりも數歳年少であつたが、志賀は里見の並々ならぬ文學的才能を愛して、全く兄弟のやうに交はつた。里見も志賀の文學的天分を尊敬して友の如く師の如く兄事して二人の間柄は正に親友のそれであつた。當時、志賀も里見もまだ學習院の學生であつたが、二人は形影相伴ふ如く、何處へ行くのも殆ど二人連と言つていゝ程だつた。その頃は志賀も里見もよく遊んだ。吉原や、京都の祇園や、さうした柳暗花明の巷に酒を銜む里見の相棒は志賀であり、志賀の相棒は里見であつた。二人はよく遊んだが、文學に對する熱心は實に眞劍なものがあつた。その時分、二人はもう學習院を出て、帝國大學の英文科に席を置いてゐたが、藝術家氣質の二人には大學は一向面白くなかつたと見えて、直ぐ大學を止して了つた。志賀は創作に專心し、里見も創作に專心した。「白樺」に出る二人の小說は、もう既に識者の注意を惹いてゐた。

そのうち里見は何を思つたか、ぷいと大阪へ行つて了つた。そして、大阪曾根崎新地の或る藝者家の二階を借りて、粹な一人住居をやつてゐたが、やがて自分の二階を借りてゐた家の藝者と戀に落ちて、その藝者を妻にすると東京へ歸つて來て新居を構へた。まだ大阪にゐた頃から、里見は小說を書くと「白樺」へ送つて發表してゐたが、愛妻を伴つて東京へ歸つて來た頃には、彼は既に傑出した新進作家として、その未來を囑望される文壇の花形役者になつてゐた。志賀は志賀で、その一字一句もおろそかにもしないやうな玉の如き名篇で、既に文壇に重きをなしてゐた。二人の作品は次々にいろいろの雜誌で發表されて文壇を賑はした。

ところが此處に一事件が持上つて、思ひがけもなく里見と志賀との絕交となつたのである。大分、前置きが長くなつたから、これから二人の絕交の經緯を書くことにしよう。

讀者よ、諸君は里見弴の名文「俄あれ」を讀んだ事がありますか。未だ讀んでゐない方は讀んで御覽なさい。此の一篇が里見と志賀との絕交の原因になつたのである。

「俄あれ」は確かに名文である。ぎらぎらと煙え立つやうな眞夏の炎天の下を練兵場を横切つて、一人の男が郊外に住んでゐる友達を訪ねて行く。訪ねて行くと、生憎と友達は留守で、それにいつか空一杯に夕立雲が擴がつて、そのうちばらばらと大粒の雨が落ちて來るので、男は友達の家に雨宿りをしてゐるうちに、雨は車軸を流すやうに烈しくなつて雷鳴が空を劈く。それで男は友達の細君に手傳つて、急いで雨戸を立てる。雨戸を立てると部屋の中はほの暗い。外は雷鳴と烈しい雨、部屋の中には男と友達の細君とが相對してゐる。雨戸を立ててほの暗い薄闇の中に、むつとするやうに漂ふ友達の細君の脂粉の香がそのむつちりとした身體を惱ましく男の感覺の上に思ひ描かせる。やがて雷鳴は遠ざかり夕立は止んだ。友達は歸つて來た。――これが「俄あれ」の大體の梗概であるが、里見弴は、その無雙の才筆で、情景をまざまざと活字と活字との間に如實に泛び上らせてゐる。ぎらぎらする炎天、草いきれ、燒きつくやうな練兵場、夕立、雷鳴、ほの暗い部屋うち、そのほの暗い部屋うちに相對座してゐる男と友達の細君、――確かに「俄あれ」の一篇は里見弴の作中にあつても逸品の一つに數ふ可きものである。里見自身も恐らく此の作に自信を持つて、少しく得意の氣持でゐた彼の眼の前へ、或日一葉の葉書が配達せられた。差出人は志賀直哉であつた。里見は何心なくその葉書を裏返した。葉書には書き殴つたやうに「汝汚らはしきものよ」とのみ認めてあつた。極度に侮辱された怒に里見はさつと顏色を變へると、口惜しさにぶるぶると小刻みに身體を顫はした。かうしてあの兄弟も啻ならなかつた里見と志賀との親交は破れた。二人は遂に絶交して了つた。

何故、志賀が里見を「汝汚らはしきものよ」と呼んだか。それは筆者が說明するまでもなく、「俄あれ」の梗概からでも讀者に察知される事であらう。志賀のやうな神經の鋭い、極度に潔癖な人には、夕立に降られたほの暗い部屋の中に坐した自分の細君を、假令小說の上でも感覺で思ひ描かれたら堪へられまい。小說家として、里見にも里見の意見があるだらうが、志賀として無理でない處もある。何れにしても「俄あれ」は二人を絶交させて了つた。

里見が志賀と絶交して「白樺」と疎遠となると、そこは兄弟である。有島武郎も生馬も段々遠ざかるとなく自然に「白樺」に遠ざかつて了つた。有島武郎、有島生馬、里見弴の三兄弟と、志賀直哉、武者小路實篤、長與善郎等との間には、引かれるとなく妙な一線が引かれて、その間柄がぎごちないものになつて了つた。就中、里見は「白樺」とも全然絶縁した形になつて了つて、「白樺」に執筆するどころか、その十周年記念號には、他の同人が殆ど顏を揃へたのに里見だけは何の寄稿もしなかつた。里見は「白樺」創立當時の同人なのだから、當然十周年記念號には執筆す可き人なのに、それすらしなかつた處に「白樺」及びその同人に對する里見の或る感情が見られるではないか。同人が集まつて相談するやうな場合にも、里見はいつも「小生差支へ有之出席致し兼ね候。云々」といふ葉書を寄越すきりでついぞ一度も出席したことがなかつた。その上、里見は久米正雄、吉井勇、田中純の三人と雜誌「人間」を起して、正義とか、人道とか、良心とか頻りに呼號してゐる「白樺」一派に反して、人間だ人間だ、もつと囚はれずに自由に樂しくあれとばかりに、暢達無碍に文壇を押し廻し始めた。

「白樺」の同人の中でも里見は最初から毛色が變つてゐた。志賀もさうだが、里見は餘りに藝術家だつた。武者小路や長與と言つたやうな人々には、いい意味にも惡い意味にも何處か生な處がある。志賀と里見にはそれがない。外の同人とは肌合が違つてゐる。合はう筈はないのである。ところが一番肌の合つてゐた志賀と妙な事から絶交して了つた里見には、外の同人と呼吸の合つて行く譯はなかつた。それで「白樺」にも亞流共が新しく續々出て來て、里見から見れば、仔細らしく愚にもつかないものを發表してゐるのを我慢がならなかつた。志賀と絶交以來、里見が自分から「白樺」を追ん出て、「人間」を起したのは里見としては當然の歸結である。

「白樺」を離れて、「人間」を起した頃から、里見と「白樺」の舊同人とは愈々妙なものになつて了つた。武者小路は人格者でもあり、溫厚な長者でもあるから、即かず離れずの態度を持してゐたが、長與善郎は里見に好感を持てなかつた。藝術家としても長與と里見

は雪と炭程も氣質が違つてゐる。長與は理想主義者で、その作品も荒削りな、何處か日本人放れした精力的な强味を持つてゐる。ところが名人肌な磨き上げたやうな作品を望む里見の眼からは、長與の作品の如きは藝術品とは言へない粗雜なものに見えるであらうし、また苦勞人の里見には長與の理想主義などは概念の遊戯か世間を知らない大人子供の甘い片言とより考へられないに違ひない。二人がひそかに輕蔑を持ち合ふのは仕方がないことであらう。そして、暗々裡に抱いてゐた此の輕蔑が、いつとなく表面へ出て來て、里見も感想などで「へッ！」と言つたやうな事を書けば、長與も「白樺」の卷末に六號で「舊同人であつた或る男の如きは」と暗に里見を指して「糞のやうな奴だ」と猛烈な罵倒を浴びせかけるやうになつた。此の長與の背後には千家元麿や小泉鐵や倉田百三などの里見に對する感情も籠つてゐたと見做す可きである。ところが長與の「糞のやうな奴だ」といふ罵倒にカッとしたのは、里見の乾分の中戸川吉二であつた。中戸川はそれ以來といふもの長與を仇敵の如く、何か長與に關して書くやうな隨筆感想の中には、さんざんに長與の作家としての價値をこき下ろした。

志賀と里見とが絶交したり、里見と長與とが詐み合つたりしてゐる一方、武者小路と有島武郎との間にも齟齬が來た。それは武者小路が「新しき村」の計畫を發表して、それに就ての主義やら意見やらを公にした時有島武郎が「中央公論」で「新しき村」の批判をやつて、「此の計畫はいつか恐らく失敗に終るだらう」といふやうな結論を下したのに歸因してゐる。武者小路は全く意外であつた。同じ「白樺」の同人の一人から、こんな手酷しい無情な批評を受け取らうとは夢にも豫期してゐなかつただけ、有島武郎の言葉は武者小路に應へた。有島武郎は歐米に留學中クロポトキンを訪ねたりして、自身も思想的に一種のアナーキストであつたから武者小路の「新しき村」と言つたやうな計畫が、微溫的な不徹底なものに思はれたのであらう。それで彼は友情を拔いて、「新しき村」に忌憚のない意見を吐いたのである。有島武郎は、武者小路にとつて先輩でもあるし、學殖も深いので、有島の批評は身に應へただけ武者小路は不快な氣はしたが、いつもの自信家に似ず怒れなか

つた。然し、武者小路について日向の「新しき村」へ行かうとしてゐた若い連中は、有島の批評を讀んで大いに憤慨した。それで武者小路も默つてゐることが出來なくなつて、「新しき村」の機關雜誌で有島に一矢酬いたが、此論爭が禍して、到頭二人の友誼は有島の死ぬまでも以前のやうな親しい狀態に歸らなかつたやうである。

まだいろいろ書く可きことはあるが、一先づ「白樺」はこれだけにして置く。兎に角、暗流の渦卷の中に、いつとなく「白樺」は瓦解して了つた。然し、あれだけの功績を文壇に殘したのだから、十分使命は果したといふ可きであらう。

二　新進作家の大同團結

「文藝春秋」と「文藝時代」と

「文藝春秋」がまさかあんなに賣れようとは、最初菊池寛もその一族郎黨も思はなかつたに相違ない。ところが賣れた、賣れた、大いに賣れた。創刊號は唯か四千部位しか刷らなかつたやうに記憶するが、最近では二萬數千部から刷つて返品も餘りないやうである。大した廣告をするのではなし、素人が出した文藝雜誌として「文藝春秋」程賣れた雜誌は先づ今日まで無かつたと言つても言ひ過ぎでは恐らくないだらう。理由として値段が廉いといふ事もあつたかも知れぬ、一代の流行兒菊池寛編輯といふ大看板が人目を惹いたのであつたかも知れぬ、また當代知名の大家が假令小さな文章にせよ寄稿してゐるといふのが眼目となつたかも知れぬ、また文壇の樂屋話與太話が掲載されてゐるので、文學少年の財布をはたかせるのかも知れぬ。理由は何れにもせよ「文藝春秋」は大いに賣れた、今も尙ほ大いに賣れつつあるらしい。

然し、賣れる賣れないといふ事は第二の問題として、「文藝春秋」が日本文學壇に寄與した貢獻の中最も顯著なるものは、有望なる新進作家を紹介した功績である。石濱金作、川端康成、今東光、酒井眞人、佐々木味津三、菅忠雄、南幸夫、鈴木彦二郎、中河與一、横

光利一等、何れも皆一敵當千の俊秀揃である。これだけの若武者を文壇に送り出しただけでも「文藝春秋」創刊の意義はある。菊池寛の功績や誠に偉大と言ひつべしだ。

菊池が「文藝春秋」を起すに就ては、それを文壇的勢力を支持し扶植する一手段として考へなかつたとは全然言ひ切れないやうな點もあるが、何れにしても菊池が最も關心したのは、彼の周圍に集まつてゐる有爲な文學に志す青年を世に出す方法として「文藝春秋」を創刊したといふのが、最も妥當な見方だらうと思はれる。そして、事實に於ても菊池の此の親切な企圖は十分果されたと言ふ可きである。何故なら、菊池の企圖した如く「文藝春秋」を背景として、續々有望な新進作家は文壇に現はれて來たからだ。

それに眼につくのは「文藝春秋」の同人として、名前を列ねてゐた十數氏が如何にも根強く親しく團結してゐることだ。これは元より頭梁としての菊池寛の貫目にもよるのだらうが、同人各自の間に相互の親愛と尊敬とがあつて始めて遂げられる事である。——かう書くと話はない。が、この讃辭は表面の「文藝春秋」同人に贈る言葉であつて、そこはそれ裏は裏である。

大體十數人の「文藝春秋」の同人は、菊池寛に統率されてその傘下に集まつてはゐるが元を洗へば悉く赤門直系といふ譯ではなく、一言に言つて了へば寄合世帶である。先づ川端康成、石濱金作、酒井眞人、今東光、鈴木彦二郎等は赤門直系とも言ふ可き第六次かの「新思潮」同人である。佐々木味津三、南幸夫、小島健三、齋藤龍太郎等は「蜘蛛」と稱する同人雜誌の連中であつた。此第六次「新思潮」の同人と「蜘蛛」の舊同人との對立との外に、何れの派にも屬さない横光利一、中河與一等がゐる。かういふ譯合で、緣あつて菊池寛の傘下に集まつて來たから、互に知り合つたとは言ふものゝ元々昨今の間柄であるから、「新思潮」の同人同志「蜘蛛」の同人同志程、「新思潮」派と「蜘蛛」派とが親しくなれる道理はない、それに一種の競爭心理が手傳ふとでも言ふのか、表面は怜悧な人々のこととてオクビにも出しはしなかつたが、內心では常に一條の雲影があつた事は事實だ。それは「文藝時代」が創刊される時に、はつきりと現はれて來るから、追々と書くことに

する。

さて「新思潮」派と「蜘蛛」派とが、かういふ調子の所へ持つて來て、更に内部を洗ひ晒して見ると「新思潮」派の同人同志にも「蜘蛛」派の同人同志にも暗雲低迷してゐるのだから、世の中の事は分らないといふのである。

「文藝春秋」の同人中「新思潮」派に屬するのは、前にも述べた如く石濱金作、川端康成、今東光、酒井眞人、鈴木彦二郎の五人であるが、今東光を除いた後の四人は何れも皆帝國大學文科出身の文學士でもなければ、嘗て一高にも大學にも籍を置いた事のない今東光が「新思潮」の同人に列してゐたのは兎に角異彩だつたには相違ない。今東光は中々博識だといふ評判だが、そして可成り和漢の學にも通じてゐるし、好學の精神も旺んで、また小説に隨筆に煥發の才氣を見せる點、そんぢよそこらの文學士の慚死に値するやうな處は確かにあるが、然し、文學士揃の「新思潮」同人の中で自分一人大學に籍のないのは何となく顧みて時としては肩身狹い思ひがしたかも知れない。由來、「新思潮」は第一高等學校を出て、帝國大學の文科に學んだ者を同人とする内規であつたから、——此ために赤門に於ける新進隨一とも言ふ可き十一谷義三郎ですら、三高出身のために「新思潮」の同人には列しないで、三宅幾三郎等と雜誌「行路」に據つてゐたものだ、——それで大學と何の關係がなかつた今東光が「新思潮」にゐたのは全く異數と言はなければならない。それだけ今東光が何とかかとか言はれたのは事實だ。それに今東光は武俠を喜ぶ風があるのでそれを殺伐な前世紀の感情として暗に嫌惡し輕蔑したのは石濱金作だ。それやこれやで今東光と石濱金作との間は、表面は兎に角内實は決して快いものではなかつた。今東光は石濱金作を蔑視するやうな口吻を親視する者に洩らすし、石濱金作は石濱金作で同じやうな口吻を一方で洩らす。どうもぴつたりと巧く行かない。その間を調停するのが、いつも溫厚な川端康成だ。併し、川端にして見ても今東光よりは石濱金作の方が一高以來の莫逆の同窓だ。やはり何と言つても今とよりは親しい。それでまた今とよりは石濱とより親しみ、相往來する。鈴木彦二郎にしても同じ事である。それでいつも今東光

は孤立の立場になるので、かなり今は懊惱して、「文藝春秋」「新思潮」の同人の列を脱しようと意を決した事もあるらしいが、決行はしなかつたやうである。

讀者諸君の中には、いつかの「文藝春秋」に掲載された今東光の小説「猛者」を讀んだ人があるだらうが、その末尾に石田といふ詩人が出て來て、主人公のある所謂猛者の蠻勇を輕蔑するやうな語氣を洩らすと、主人公は主人公で猛者一流の哲學から反つて詩人石田を輕蔑する。詩人石田といふのは誰がモデルで、主人公は誰かは知らないが、前記の事情に通ずるものには大凡見當がつかない事はあるまい。

斯の如く誰も彼も和氣靄々だと思つたら、餘り早合點過ぎるのだ。今東光と石濱金作との關係だけではない、同じ「新思潮」の同人でも酒井眞人は、可成り皆から毛嫌ひと言ふよりも、寧ろ輕視されてゐるやうに見える。何故だらうか？　酒井眞人は第一高等學校の出身だし、大學では川端、石濱、鈴木より一年先輩ではあるが同じ大學なのだし、また同じ「新思潮」の同人なのだから、親しい筈のものでなければならないにどうも輕視され勝で、いつも繼つ子になつてゐたやうだ。「おつちよこちよいだから」と暗に言はれてゐたやうだが、どうもそればかりが理由ではないらしい。何にしても繼つ子扱ひにされて、面白く愉快に感じる者があらう筈はない。元より酒井眞人だつてさうだらう。そこで酒井は「文藝春秋」の同人であり乍ら滅多に菊池寛の門も叩かなかつたし、また滅多に同じ「新思潮」の同人である川端や、石濱や、鈴木や、今とも往來はしなかつた。そして、どう鼻を曲げたものか、それともどう意氣相投合したものか、「文藝春秋」から見れば敵の陣營に關するプロレタリア派の論客村松正俊と相往來して肝膽相照し、常にカツフエからカツフエを歩いて酒の香に浸つてゐた。菊池寛は流石にまさか問題にもしなかつたらうが、酒井眞人の此態度は「新思潮」派に屬する川端、石濱、今、鈴木等に增々苦々しく輕蔑す可きものに思へたのは、「文藝時代」創刊の時にはつきりと分るのだ。此間の消息は何れ後から書くやうになるだらう。「文藝春秋」の同人に小島健三といふ男があつた。小島は佐々木味津三や南幸夫等の友人で、やはり舊「蜘蛛」の同人だつたのが、佐々木たちと一緒に「文藝春秋」

の同人になつたのだが、同人に名は列してゐながら、筆者の記憶にして誤なくんば、ついぞ一度「文藝春秋」に書いたことはなかつたやうである。小島は傳聞すると、プロレタリア的精神を文學に有してゐたらしいから、ブルジョア文學の陣營と目される「文藝春秋」に書くことを潔しとしなかつたのかも知れない。中に立つて佐々木味津三は隨分困つたらうが、小島健三はやがて自分から「文藝春秋」を追つ出て了つた。

かうした紛糾にあつて、その間の煩勞を嘗めないだけ得をしたのは、兩派の何れにも屬さない中立の横光利一や中河與一である。就中、横光利一は新進作家として最も名聲が揚がつた。いや、さう言へば横光利一だけではない。「文藝春秋」生れて二年有半、何とかかとか內輪の紛糾はあつたものゝ、佐々木味津三にしろ、石濱金作にしろ、今東光にしろ、南幸夫にしろ、川端康成にしろ、中河與一にしろ、また其他鈴木彥二郎にしろ、酒井眞人にしろ、菅忠雄にしろ皆新進作家としてそれ相當に文壇に認められるやうになつたのだ。これだけの人々を兎に角育てはぐくんで巢立ちさせた菊池寛は、その統率の手腕と鞭撻との報償に與る資格は十分ある。そして、菊池寛はその報償に與つたか？　確かに菊池寛は自分の羽翼の下から此世に巢立ちさせた連中から報償を貰つた。が、その報償は菊池寛の夢にも思ひ及ばなかつた程の手痛い報償であつた。その報償とは何？　言はずとしれた「文藝時代」の創刊である。

「文藝時代」の創刊を主謀したのは今東光であつた。今東光は菅忠雄を相棒にして、新進作家の大合同團結を企圖したのだ。「既成文壇既成作家は疲弊してゐる。現在の文壇に新しい生命の皮下注射を行ふのは我々新進作家より外にはない。新しい感覺、新しい神經、新しい個性、――少くとも新しい價値を文學に創造するのは、我々の任務であり且つ義務でなければならない。そのためには先づ、有爲なる新進作家が團結して一の運動を起さなければならない」といふ理由で、今東光の考へた新進作家の大同團結は、常々既成文壇への叛逆とその破壞とを叫んで來た川端康成の贊成を克ち得た。石濱金作も贊成した。鈴木彥二郎も元より反對ではない。が、これだけでは第六次「新思潮」の反復に過ぎなくつて

意義をなさないから、もつと同志を集めなければならない。そこで横光利一を說いた。新時代の作家の急先鋒を以て任じてゐる横光が、その企に贊成しない譯はない。横光は贊成した。中河與一も加はつた。早稻田からは伊藤貴麿を引拔いて來、三田からは加宮貴一が走せ加はつた。諏訪三郎をも口說き落した。十一谷義三郎も勸說して承諾せしめた。更に最近批評家として、文壇からその識見と聰明とを認められた片岡鐵兵をも引入れ、佐々木茂索をも誘つて同人とした。これで、先づ團結したもの十四名となつた。顏觸を列記すれば、佐々木茂索、片岡鐵兵、十一谷義三郎、加宮貴一、諏訪三郎、伊藤貴麿、中河與一、横光利一、川端康成、石濱金作、鈴木彥二郎、今東光、菅忠雄である。佐々木味津三がない、佐々味津三は除外されたのか。

顏觸から言つても佐々木味津三は當然、最初に指を屈せらる可き境地と條件にゐる筈ではないか。佐々木味津三だけではない。南幸夫は如何したのであるか。南幸夫の如きも當然入つてゐなければならない筈の人である。それがはいつてゐない。佐々木は「文藝春秋」の同人中、「新思潮」派に對立してゐる「蜘蛛」派の人である。南幸夫もまたさうである。さうして大同團結を劃した今東光等は「新思潮」派に屬する連中である。これによつて考へても、「文藝春秋」時代から如何に兩派が內心相抗爭してゐたか、その機微がうなづけるではないか。犬養健や、牧野信一や、金子洋文などまでに相談を持つて行きながら、何と言つても「文藝春秋」の同人で新進作家の中でも比較的世間にも文壇にも有名な佐々木味津三を後廻しにしたところに流れてゐる暗流の濃さが十分想像出來る。併し、如何に「新思潮」派の者が陰に陽に佐々木味津三を斥けても、兎に角除外し切ることは出來ない。それで佐々木を加へる可きか如何かといふので、澁々ながら招じられたのである。然し、南幸夫の方は反對がのが穩當だらうといふので、隨分論議も出たやうだが、結局やはり加へる多くつて最初は相談にも與らなかつたやうであるが、それでは佐々木味津三をも加へた以上穩當ではなからうといふ事になつて、どうやら最近連中の中へ入れたやうだ。

それにまた最初の顏觸に酒井眞人のないのは何を語るのであらうか。酒井眞人は川端、

石濱、今、鈴木と一緒に、第六次の「新思潮」の同人でもあつたのだし、それに「文藝春秋」の同人でもあつた上に親しい友人の間柄であつた筈だから、友人としても最初に相談を持つて行く可きところを全然最初から除外したといふのは、何を抑々語るであらうか。それは如何に表面から親しく結ばれてゐるやうに見えても、一歩中へ入れば妙な暗雲が低迷してゐる事を語つてゐる立派な證據とも言ふ可きである。これは酒井眞人の場合だけではない、佐々木味津三の場合に於ても、南幸夫の場合に於てもまた言へる事である。さうしてまた更に言へば、あんなに團結してゐたらしく見える「文藝春秋」の同人が、内部ではやはり暗流の交錯に支配されてゐることを語るものではないか。それはさて措いて、酒井眞人を連中に加へなかつたことは、酒井と親しい溫厚の佐々木茂索を怒らせた。

「如何して酒井を入れないのだ。酒井を入れないのなら、僕も入らない」と佐々木茂索が言つたとかで、外の連中に較べては一枚格上とでも言ふべき佐々木茂索の御機嫌を損じてはならないところから、佐々木茂索への義理から最近酒井眞人をも入れたやうだが、佐々木と酒井との友人關係に較べて、今や、川端や、石濱や、鈴木は、ずつと酒井と古く親しい筈だから、酒井を加へない事を佐々木よりも前記の諸君の方が怒らなければならない筈なのに、反つて前記の諸君が無視してゐたらしいのは、何と面白く、悲しく、難しい世の中ではないか。

兎に角、かういふ風にいろいろの經緯はあつたが、今東光等の劃した新進作家の大同團結は、一先づ出來上つた。その具體的な運動が昨年の十月創刊された「文藝時代」である事は、今更新しく筆者が言ふまでもない事であらう。

ところが話變つて菊池寛である。菊池寛は今東光等の策してゐる新進作家の大同團結に就ても、また「文藝時代」の發行に就ても、何等與り知るところがなかつた。謂はばこれは最初菊池には秘密で、若い者同志が奔走して計畫し成立させたものなのだ。大腹の菊池といへども、不快ならざるを得ない。

菊池にして見れば今にせよ、川端にせよ、横光にせよ、また中河にせよ、石濱にせよ、

其他大半は自分が子飼ひから、漸く一人歩きするだけに仕上げてやつたのである。即ち「文藝春秋」を起して、作品を世に問ふ道をつけてやつたのは勿論、「新小說」の門戸も出來るだけ解放して、彼等を世に出す舞臺にしてやつてゐる。その御蔭で新進作家とか何とか言はれるやうになつて、「新潮」や其他の文學雜誌、婦人雜誌や「改造」にまで進路をつけてやつた。それにも拘はらず、いざそれだけにしてやると、まるで裏切るやうに雜誌など拵へて、それで恩義が濟むといふのか。それも雜誌がないと言ふなら兎も角、機關としては「文藝春秋」があり、また「新小說」もあるのだ。それを何事ぞ、くそッと思ふと、菊池は今まであつた「文藝春秋」の同人をすつかり解散して了つた。

「文藝時代」に走つた連中は大いに面喰つた。

そこで先づ片岡鐵兵は、時事新報の文藝欄に「新しき文學のために」といふ文章を書いて、その終で助太刀の形で言つた。「自分は文藝春秋の同人ではなかつたが、今度文藝時代を創刊するに就ても、それは文藝春秋の同人と菊池氏との間の友情には、何の障碍とならない事を信ずる。」云々と言つたやうなことを。

また横光利一は「文藝時代」の創刊號の何處かで、「自分達は新しい時代の文學を創造しようとする。それは菊池師も喜んで下さるであらう。」云々といふやうな意味を書いた。

更に川端康成は川端康成で、讀賣新聞に「文藝春秋と文藝時代」と題して、兩者の關係を說明し、且また菊池との關係をも釋明して「自分達は物質的にも精神的にも菊池氏に負ふてゐるところが多い。それは深く感謝して忘れ難いところだ。從つて文藝時代を出したからと言つて、自分達と菊池氏との友情に微塵の動搖も來可き筈はない。云々」と言つたやうな事を書いた。

かう言つたやうな辯明やら、說明やら、釋明やらが、どれ程菊池の怒を緩和したか知らないが、菊池が「文藝時代」に好意を持つてゐない事は確かだ。それは「文藝時代」が創刊されても、それに就て一字一行も「文藝春秋」に書いてないし、寧ろ抑ゆることの出來ない怒氣を六號に洩らして、「一人一人では文壇に出られないから、新進作家の大同團結だ

なんて言つたところで、結局束になつて行かうといふのだ」と暗に皮肉つてゐる。

かくて何と言つても「文藝春秋」は分裂したのだ。

三　プロ、ブル對陣の卷

歐洲の大戰は、いつか露西亞の革命となり、そしてその革命の渦卷く炎は爆發して獨逸をすら赤く燃え上らせた。この地球上の一角における第四階級の勃興は期せずして世界各國のプロレタリアに異常な刺戟を與へた事は言ふまでもない。勞働運動は盛んになつた。無產階級解放の叫びは朝野を壓する樣になつた。この機運が、資本主義組織の下にある以上、極東のわが日本をも訪れて來たのは當然である。メーデーは大いに盛んになつた。勞働者は昂奮した。社會主義、共產主義、無政府主義に關する書籍さへ市上に散見されるやうになつた。そして、更に斯うした機運はいつかプロレタリア文士と言つたやうなものを生むに至つた。

プロレタリア文士とは、プロレタリアの意識を以て、文學の制作に從ふ者の謂らしい。彼等は此主張の下に、今までの文學及び文學者をブルジョア意識に終始して來たものとして、頭から排擊し否定した。

藤井眞澄、新井紀一、內藤辰雄、吉田金重等は、雜誌「黑煙」を興して、彼等の作品を發表した。津田光造、井東憲、佐野袈裟美等は「熱風」に據つて氣焰を揚げ、小牧近江、村松正俊、靑野季吉、平林初之輔、金子洋文、松本弘二、今野賢三等は、雜誌「種播く人」の下に團結した。その他、亞米利加から歸つて來た前田河廣一郎は、雜誌「中外」の編輯に從ひながら、言說と作品とを以て旣成の文壇に挑戰した。かうして所謂プロ派の文士の活躍が、漸く眼について來るやうになる一方、文壇の士の中にも左傾してプロ派に投ずる人が續々と現はれるやうになつた。先づ小川未明がさうである。秋田雨雀、江口渙、藤森成吉、其他群小文士にして、流行にかぶれて左傾したものは無數にある。加藤一夫も雜誌「自由人」の一味を率ゐて、プロ派の陣營に身を投じた。斯の如きプロ派が隆盛となるに

つれて、「新興文學」「文學世界」等が創刊され、プロ派文士の壇場となつたが、また嘗て「改造」と角逐した程の「解放」は、いつか文藝欄の全部を擧げて、プロ派の作品發表に提供した。一方、新聞の文藝欄もプロ派の文士が漸く蠶食するやうになつた。そして、彼等は機會ある毎に今までの文學者をブルジョアだとして攻擊し、その文學をブルジョア意識の所產として、彼等の見地から否定した。就中、最もひどく彼等の矢面に立つたのは、菊池寛、久米正雄、里見弴、芥川龍之介、宇野浩二等の一流作家、流行作家だつた。前田河廣一郎の如きは、幾度か正面から筆を執つて菊池寛の藝術家としての態度、思想家としての態度を痛擊した。

此處に於てか菊池寛たるもの敢然として起たざるを得んやである。菊池は一は所謂プロレタリア文學を逆擊せんがために、二にはプロレタリア文學者にまた逆擊を加へんがために、卒然として雜誌「文藝春秋」を興した。「文藝春秋」には御大菊池は元より佐々木味津三、南幸夫、岡榮一郎、佐々木茂索、小島政二郎、石濱金作、川端康成、今東光、鈴木彥二郎等の家の子郎黨を始として、其他プロ派からブルジョア文學者だと目されてゐる殆ど全部の作家詩人が筆を執つたので、宛然所謂ブルジョア文學の牙城である觀を呈した。プロレタリア派で、此敵陣ともいふべき「文藝春秋」に卒先して乘込んで、大いに縱橫の健筆を揮つたのはプロ派の論客江口渙であつた。江口は「斬捨御免」と題して、所謂「文藝春秋」に據る酒井眞人や今東光の如き若武者を揶揄し嘲笑すると共に、またプロ派の宮島新三郎や伊福部隆輝や小島德彌を急に左傾した「赤大根」と呼んで侮蔑の辭を見せた。伊福部や小島が憤激したことは筆者が言ふ迄もないだらう。とりわけて今東光の如きは、それこそ烈火の如く憤つて「時事新報」の文藝欄で江口に應酬して、果は「雌雄を刄の中に相見えて決してもいい」とまで言ひ放つた。斯くて文藝上の論爭である可き筈の議論が腕力沙汰になりさうな物凄いものになつてきた。文壇はいつか所謂ブルジョア文士とプロレタリア文士との二陣營に別れて、虎視耽々、大いに睨み合ひの狀態になつた、謂はば文壇の中心勢力の爭奪戰とでも言はうか。久米正雄はそこで「時事新報」の文藝欄に一文を章

して、プロ派に酬いた。その一文は「舷を叩く」といふのであつたが、意味は、プロ派とプル派とを源平に譬へて、如何にプロ派が騒ぎ立てやうとも、扇の的を射落す一人の那須の與市がないではないか。われわれは舷を叩いて、一人の那須の與市の出現を待つてゐるのにと云つたやう文章であつた。言ふ迄もなく久米の此文章にはプロ派に對する揶揄と嘲笑がある。言ふ意味は、プロ派の文士がいくらブルジョア文學を倒滅せよとか何とか叫んで、われわれをブルジョア作家として攻撃したところで、われわれを文壇から驅逐するに足るだけの勝れた作品を一つ書く者すらプロ派にはないではないか、そんな事でわれわれを文壇から驅逐し得ると思つたら、寧ろ氣の毒だ。久米はこんな氣持で「舷を叩く」の一文を書いたのに違ひない。久米の此一文には宇野浩二も大いに賛意を表した。就中、菊池寛の如きは、もつと端的に文壇のプロ派に挑戰して、「乞ふ入れ代らん」といふやうな氣を負うた文章を發表した。菊池は言ふ、文壇は何と言つても今われわれのものだ、口惜しければ實力で取りに來ればいい、素晴らしい作品でも書いて文壇の中心勢力から、われわれを驅逐するがよい、その時は何時でも入れ代つてやらう、然し、それまではプロ派がいくら吠えたところで文壇はわれわれのものだ。と、かういふ意味の傲語を、菊池は「乞ふ入れ代らん」なる文章の中で書いたのである。「舷を叩く」にせよ「乞ふ入れ代らん」にせよ、久米の文章も菊池の文章も多大な反感をプロ派の間に挑發した事は改めて言ふまでもあるまい。

然し、大震災を境として、反動思想に影響されてか、さしもあれ程までに隆盛を極めてゐたプロレタリア文學は、文壇の表面から非常に影の薄いものとなつて了つた。尤も影の薄いものとなつては了つたが、それは決して消滅したといふ意味ではない。藤森成吉にせよ、秋田雨雀にせよ、また小川未明、江口渙、加藤一夫は言ふ迄もなく、前田河廣一郎、中西伊之助、青野季吉、平林初之輔、小牧近江、今野賢三、武藤直治、金子洋文、村松正俊、松本弘二、山田清三郎等は「種播く人」の後身とも言ふ可き「文藝戰線」の同人として勢揃ひはしてゐる。然し、正直なところ以前ほど文壇の表面に勢力はないやうだ。勢力

はないが、存在はしてゐるのだから、やはり文壇にプル派とプロ派との對立があるのは事實だ。その對立が時としてどういふ風に發するか、その面白い（と言へば語弊があるかも知れないが）一つの光景を宛らに讀者諸君の御眼に掛けるとしよう。

それは餘り遠いことではない、去年の初夏頃の事だつた。或夜、神樂坂のカフェプランタンの階上へ、金緣眼鏡を掛け鼻下に鬚を蓄へた一人の紳士が、セルか何かの着流しでふらりと現はれた。紳士は友人を待ち合はす約束でもあつたのか、部屋の中の誰かを探すやうだつたが、ふと部屋の一隅の卓子を占めてゐる三四人の一團が眼に入ると、瞬間人目に立たない程の當惑の影がその額を曇らせた。然し、紳士はさり氣なくにこやかに「やあ！」と好人物らしい笑顏で、一團の人々に輕く會釋したが、直ぐ靜かに踵を返して、その儘部屋を出て階下に下りて行きかけた。その時である、三四人一團になつてゐる中のでつぷり肥つた三十七八の男がいきなり鋭い調子で「久米君ッ！」と紳士の背後から呼びかけた。

呼ばれた紳士は久米正雄だつたのである。呼んだ男はプロ派の中でもその人ありと知られた宮島資夫である。宮島資夫は辻潤や秋田雨雀、相馬泰三などと、大いにビールの滿を引いてゐたのであるが、そこへ上つて來た久米正雄が「やァ！」と言つた儘、直ぐ匆惶と踵を返して出て行かうとしたのが、先づぐつと宮島の癪に障つたらしい。否、久米正雄は所謂プルジョア作家の巨頭の一人と目される人、宮島資夫はプロ派の頭領株として自他共に許してゐる人、豈平素よりの反撥と反感無からずして何ぞやであらう。「久米君ッ！」と背後から鋭く呼ばれて、久米正雄は思はず立ち止ると、宮島の方を振返つた。その久米へ宮島は直ぐ疊み掛けた。

「君、何もそんなに慌てて逃げなくつたつていいぢやないか」

宮島の言葉には無量の刺が含まれてゐる。元より敏感な久米は直ぐそれを感じたに相違ない。然し、「神の如く」弱き彼は、宮島の言葉に無量の刺を感じながらも、それを反撥しようとはしないで、善良そのものゝやうな笑顏を作りながら口籠るやうに宮島に答へた、

「何も逃げやしないよ、君！」

「そんなら何もそんなに急いで出て行かないで、こちらへ入つたらいいぢやないか」

宮島の言葉は何處までも鋭い。何處か殺氣立つたところがある。久米はそれを感じたので言はれる儘に素直に再び部屋の中へ歸つて行くと、宮島等の一團とは少し離れた卓子に腰をおろした。と、そこへ偶然かどうか知らないが廣津和郎が片岡鐵兵と連立つて上つて來た。そして久米や宮島等と顏を見合せると、「やア！　やア！」と言ひながら、廣津と片岡とは久米の傍の椅子に腰を下ろした。思ひがけない廣津の出現を、溫厚な久米は百萬の味方を得たやうに感じたであらう。然し、プロ派の中でも猛者として聞える宮島は、恐らく廣津の出現を齒牙にも掛けなかつたのか、勢烈しく久米に言ふのだつた。

「久米君、君は一體生意氣だよッ！」

久米は默然として一語も發しなかつた。不氣味なる沈默が一座を支配した。宮島は更に追擊するやうに言つた。

「舷を叩くつて、ありや何だい。あんまり人を馬鹿にするなッ！」

もう明らかに宮島の言葉は挑戰的だつた。平素の反感が、餘りにも露骨にその言葉に現はれて來た。久米はやはり默然として一語をも發しなかつた。もし久米が一語でも發しようものなら、「何をッ！」と宮島はビール壜をひつ掴んで久米に迫つて來るに相違ない。そしてまた恐らく宮島は內心それを望んでゐなかつたとは誰が言ひ得よう？　久米はそれを餘りにもはつきりと感じた。それで溫厚な彼は、さうした殺伐な場面の突發を避けるために、飽迄も沈默を守り拔かうとしたのであらう。その時、廣津和郎が仲裁するやうに、また一方久米を庇ふやうに、靜かな調子で宮島に話し掛けた。

「宮島君、君はさういふ風に久米君に突つ掛つて行くが、何も久米君は君を敵としてゐる譯ではない。……」

廣津和郎は先づかう說き出して、諄々と久米のために辯じた。然し、最初から挑戰的な態度一方である宮島には、廣津がいくら條理整然と述べ立てようが、そんな事はどうでもいい事だつた。宮島は廣津をも嘲弄した。「ふむ。君は頭がいいよ、實にいいよ。」

廣津にかう言つた宮島の言葉の中には、明らかに露骨な嘲弄があつた。この宮島の言葉を聞くと、ある憤激に廣津は瞬間顏色を變へたやうであつたが、それを何氣なく直ぐ壓し殺して了つた。ここで怒れば宮島と喧嘩するよりない。それは聰明な廣津の堪へ得るところではない。何處迄も辛抱し拔かう、さう思ふと、廣津はもう默つて口を噤んで苦笑してゐるより外はなかつた。然し、宮島は飽迄も挑戰的だつた。彼は更に突つ掛つて行つた。

「廣津君、君の弟子か何か知らないが、片岡鐵兵なんて奴も大體生意氣だよ。」

宮島はまだ片岡の顏を知らなかつたと見えて、片岡が廣津の傍にゐた事に氣が附かなかつたらしい。そこでそれまで默つてゐた相馬泰三が、人の惡い小姑のやうに、片岡の方を指差しながら言つたものだ。

「宮島君、片岡君はあそこにゐるよ」

宮島は默つてジロリと片岡の方を見た。片岡はいつも青ざめた顏を更に青くして、泣いてゐるやうな笑顏をして、默つて何も言はなかつた。

其時今迄ちびり〳〵ビールの杯を傾けてゐた辻潤がいきなり言つた。「創作とか何とか言ふやうなものを書いて、一枚七圓だの十圓だのつて金の取れるのが第一不思議だよ。」

辻の傍にゐた秋田雨雀が直ぐ和した。「さうだ全く不思議だ。」

辻潤の言葉にも秋田雨雀の言葉にも、元より久米や廣津に當るものがあるのは說明する迄もなからう。譴責的と言へば譴責的、挑戰的と言へばやはり挑戰的な言葉である。然し何處までも殺伐な喧嘩を避けやうとした溫厚で聰明な久米と廣津とは、最後まで言葉を返すことなく沈默を守り拔いた。そのために危いその夜の最後まで、兎も角も表面靜穩が保たれて無事散會したのは何よりも目出度いことだつた。

右に述べたのは、無事で散會したが、これからのは無事で終るかどうか、文士はプロ派にしろ、ブル派にしろ全く言葉その儘に命掛けとなつて來たと申さなければならん。實際これからの文士はペンの他に短銃の一挺位持つてゐなくてはならないと、戲談ではなく言ひたい程物騷である。物騷ついでにもう一つ書いて置く。尤もこれは物騷な事にはなりは

しなかつたが。と言ふのは、菊池寛と前田河廣一郎との一場だ。

菊池と前田河とは、これまで再三、殺氣立つた論爭をやつた犬猿の間柄だが、一夕、菊池が神樂坂を散歩してゐると、ばつたり前田河と邂逅した。すると前田河は何を思つたのか、いきなり言つたものだ。

「どうだ菊池君、一緒に一杯飲まないか」妥協か、和解か、喧嘩か、然し、それは分らなかつた。何故なら菊池はにこりともしないで、

「僕は御免蒙る」と言ふと、さつさと行つて了つたから。一緒に飲んで前田河にどんな策戰があつたのか、それこそはただ神樣だけが御存じである。そして、今後プロ派とブル派とが文壇でどうなるか、それもただ神樣だけが御存じである。

文士今昔物語

一　佐藤春夫の今昔

一

私が初めて佐藤春夫氏に對面したのは、氏が二十四五の頃、その堂々と文壇に乘出す二三年以前であつた。しかもすでに當時の文壇に佐藤春夫の才名を知らぬ者は稀れであり、氏を直接知る程の文人は、誰しも未來の大家を氏のうちに見出して、一種の畏れと期待とを抱かぬ者はなかつた。若し春夫氏が望みさへしたなら、一作家としての地位は、早くも

二十二三の年に、樂々かち得られたであらう。と信じられるほど、それほど氏は早熟の才人であつた。けれども氏は、氏が後に私に語つたやうに、品物を選ぶにしても、一流の物が得られないならば、間に合せの物で我慢する、といふ性格の人だから、あせつて文壇の普通席に割込まうとはしなかつた。また否應なしに詰まらぬものを書いて米鹽の資に充てなければならぬといふやうな境遇からは完全に免れてゐた。生田長江氏の言葉に從へば、わが佐藤春夫氏は、ニイチエの父の如き父を有つて生れた。だから若し春夫氏が、ニイチエの如くえらくならないならば、それは境遇のせゐではないのであつた。

父と父とのことは知らないが、ニイチエと佐藤春夫氏とは違つてゐる。ニイチエの戀愛觀がどうであるか私は殆ど知らないけれども彼は生涯獨身でをはつた。わが春夫氏ば、今日までに再度結婚をした。さうして生涯戀をしつづけて行く人である。（そのことは氏自身の告白の通りである。）——さて、私が初めて會つた時代は、氏の第一次結婚時代であつた。詳しく言へば、名作「田園の憂鬱」を、作者自ら體驗しつゝあつた時代である。或日佐藤春夫氏が、田舍の草葺屋根の家から、自轉車に乘つて東京の街へ出た時、生田春月氏の書齋を訪ねた。その日私は偶然そこに行合せて、初めて春夫氏を見たのであつた。

「どうだね、大杉榮氏のところにでも行つて、フランス語をやつて見る氣はないかね。」と、そんな風に、生田春月氏が話しかけた。それに對して佐藤春夫氏が何と言つたか、今私は思ひ出さうとして見るが、思ひ出せないが、どうも春夫氏は「うむ」とか「いいね」とか輕く短く言つたきり、うつ〳〵とした態度で坐つてゐたらしく思ふ。

「この男は今一體何を考へてゐるんだらう？」

私はその時、春夫氏の態度をぬすみ見て、疑問を抱いた。生田春月氏は、佐藤氏と私との二人の客に始終そは〳〵と氣を配つてゐるやうである。しかし暗鬱な眼を伏せ勝ちにして、おつとりしてゐる佐藤春夫氏の心は、一體どこにあるのか？　それが謎のやうに思はれてならなかつた。——私はその日氏とは一語も交へなかつた。

今から思へば思ひあたるが、その頃こそ佐藤春夫氏に取つて、最も寂しい懷疑と焦燥の

時代であつたのだ。

佐藤春夫氏と再會の機會にぶつかつたは、その後間もなくであつた。生田長江氏の書齋で、長江氏に紹介されると、二人は互に、もう知つてゐるのですと言ふ心持で、輕く點頭を交した。その時の佐藤春夫氏の顏を、私は今も思ひ浮べることが出來る。細長い頸の上にのつかつてゐる、細長い黑い顏だ。一見無關心を裝つてゐるやうで、實はまことに用心深い表情が動く。それはその細いやうで大きい眼から來る感じかも知れぬ。鋭い神經が働き疲れて憂鬱に見える顏だ。その顏が、不意にひよいと私の方へ、形を崩さず寄つて來ると共に、太い幅のある聲が、私の耳を捉へた。

「――アナトール・フランスのものにね、こんな物語があるんだ――」

私は面喰つた。ちやうど生田春月氏がちよつと座を外して、私と佐藤氏と斜め差向ひに坐つたまゝ取殘された時で、私はぼんやりしてゐたところだつたから。それまで一言も交し合つたことのないのに、突然、アナトール・フランス――と來たものだから。

しかし、春夫氏の言葉を聞いてゐると、それは巧みな飜譯文を巧みに讀み聞かされてでもゐるやうな氣がした。一句々々が新しい、生き〳〵した感じを與へる。けれどもその話の一貫した筋と意味とを私は結局呑み込むことが出來なかつた。何故かと言ふと、最初面喰つた時に取落した落着きと注意力とを、取まとめる餘裕がなく、ただ「はあ」といふ返事を時々しながら實は、始終もじ〳〵してゐたからである。

ところが佐藤春夫氏の方は、私が本心で聞いてゐるかどうか、そんなことは一向無頓着な風で、自分の言葉に自分で聞き入るやうにぽつり〳〵と語つてゐた。その語勢が熱して來ると、私は本當に話を聞いてゐないことが恥しく、知らず識らず顏が熱くなり痒くなつた。或は春夫氏は、自分のしてゐる話に、聽き手が興味と理解を本當に持つてゐないことに氣がついてゐたかも知れないけれども、氏は氏自身の話し振りを氏自身樂むかのやうに熱心に、「ノオトル、ダムの曲藝師」一篇を語り終つた。そして、もう聽き手に與へたであらう感興の如何など吟味しようとしないで、再び憂鬱なその顏を俯向けてしまつた。私は

今は佐藤氏に濟まないことをしたやうで極りが惡かつたことを覺えてゐる。

ずつと後に、私が可成り頻繁に佐藤氏を訪問するやうになつてから、私はたび〳〵佐藤氏から創作の筋を語り聞かされて、氏が物語を人に聞かせるのは、聽き手を樂しませるためよりも、寧ろ氏自身のためにするのだといふことがわかつた。春夫氏は自分の創作の構想を人に話してゐるうちに、自然にそれを完全なものに纏め上げるのである。だからつまり氏の物語の聽き手は、氏の創作の產婆役を勤める譯なのだ。私なども何度かその產婆役――甚だ賴りない方の――の一人を勤めたことになる。がしかし、曾て「ノオトル・ダムの曲藝師」の筋を私に物語つた時の佐藤氏の氣持は、全然別のものではなかつたかしら。私は今から想像する。あの「ノオトル・ダムの曲藝師」は、春夫氏の心を強く動かしたものに違ひない。それてそれを語ることによつて、氏自身の心境の一面を語つて、自ら慰めの勵ましたのではあるまいか。――實際佐藤春夫氏は當時、自分自身の藝術的天分に對して不安を感じ、時には絕望を感じさへして、煩悶したのであつた。

二

大正五年かの秋、私は初めて佐藤春夫氏の作品を見た。生方敏郎氏主宰の「文藝雜誌」に掲載された「田園雜記」である。「田園雜記」は、生田長江氏が「文藝雜誌」に推薦した。しかし、生方氏はそれを容易に掲載しようとしなかつた。

「佐藤君の原稿を載せてくれ給へ。あれはなか〳〵いいもんだぜ。」

長江氏が催促した。

「うん――だけどあれば、何だか佐藤君らしくないぢやないか。僕はもつときび〳〵した例の本間君の誤譯指摘のやうな、痛快なものを期待してゐたよ。」

敏郎は不服を唱へた。

「しかし、田園雜記は佐藤君の本當のものなんだ。まあ兎に角載せて貰ひたい。」

「そりや少しなら載せてもいいさ。」

そんな工合で、「田園雜記」は僅か三四頁だけ、雜文並の取扱ひで、「文藝雜誌」に掲載された。實にこの「田園雜記」が、佐藤春夫氏の名を文壇の頂上にまで持ち上げたところの「田園の憂鬱」の一部分であつたのだ。

私は初めて、名譽ある新進作家の佐藤春夫氏を、勳坂の、とある路地の奥の小さな坂の降り口にある、門のある古ぼけた家に訪ねて行つた。家の中は大變暗く、濕つぽく、うそ寒い感じがした。「田園の憂鬱」の作者には、この住居は如何にもふさはしく思はれた。けれども、第二次の結婚生活へ移つたばかりの新郎新婦の家としては、餘り陰氣臭いやうにも見られた。

「この家は、日當りが惡いでせう。」

「あゝ、天氣の好い日の午後、ちよつとの間廊下の隅の方に日が射すだけだ。」炬燵にあたりながら、そんな風に答へて、「田園の憂鬱」の作者は、例の癖で下のやうな意味のことを語つた。「今度は都會の憂鬱を書いて見ようと思ふ。他所に預けて置いた仔犬が、大きい美しい奴になつてゐるだらうと思つてゐたのに、脚の短い犬になつてゐるのを見たり街の暮れ方の空を飛んで行く雁の絲枠を廻すやうなその羽音を聞いてゐたりする時には、やつぱり僕は憂鬱を、都會の憂鬱を感ずる——」

間もなく春夫氏は、駒込の神明町へ引越した。氏の書齋は、窓の外に墓場の見える、しかし割りに明るい二階であつたが、お午前後は何時行つて見ても雨戸をすつかり締切り、少しの光線をも恐れる土龍みたいに、光線の射し込む隙間といふ隙間を悉くふさいで眞暗な部屋の中に寢てゐた。それでも熟睡することは一度もないのであつた。

「この近年、ただ思ふことは、一度本當に眠つて見たいといふことだ。」

さう嘆息をしてゐた。——この間に可成りの創作が生れた。それには眠られぬ夜の樣々な氣持や、月の美などを取入れたものが多かつた。何時の間にか、佐藤春夫氏は文壇の花形となり、所謂押しも押されもせぬ大家になつてゐた。

それでも氏の憂鬱は、氏と共に育つて行くやうに見えた。

「花の盛りといふものが、ほんの一時で終るやうに、作家の持て囃される時期も、ほんの一時だ。僕などもたつた今駄目になるんだから、もつと語學でも勉強して、翻譯で生活の出來るやうにして置かなけりやならない。」

「僕に若し十分な財産があつたら、僕は小説なんか書かない。永久に遺るやうな家を建てる。そして、美しい男女をそこへ集めて、自由に藝術的な生活をさせる——」

折にふれて、春夫氏はこんなことを言つた。春夫氏の言葉でそれを聞くと、つひその思想の中に惹き込まれて行くやうな魅力があつた。

「あなたの初戀の話をきかして下さいな。」

或時私がかう言つた時、春夫氏は大凡次のやうに答へた。

「いや初戀といふものは、僕にはないよ。何故つて、僕は何時でも初戀をしてゐるんだから。絶えず戀を追つてゐるのだ。僕は一生戀をしてゐないと弱るだらうよ。さうして、僕は性慾と戀とはわけてゐる。」

「創作も性慾のやうなものだね。」

私は春夫氏の、それらの言葉を聞いて、氏の憂鬱と不眠症との由來がわかるやうな氣がした。

三

佐藤春夫氏の第二次の結婚生活が破れて、氏は東京を後に、臺灣へ、それから支那へと旅をした。私は長いこと氏を見なかつたが、二年ばかり後に、上澁谷の令弟の家に寄寓して居る氏を訪ねて行つた。玄關の上り口には洋行用の大トランクが置かれてあつた。春夫氏の居間は、見晴らしがよく、犬でも飼つたら好からうといふ氣がしたので、私は、

「犬を飼つてゐらつしやいますか？」ときいた。

「いや。」と、佐藤氏は云つた。

「可愛いのを一ぴき飼つたらどうです。脚の長い——」

「うん。しかし僕はもう犬に限らず、どんな物にでも、それ〴〵の美を發見することが出來るね。脚の短い犬でも、ちよこ〳〵と走るところは可愛いぢやないか。」

と、春夫氏は輕く微笑を含んで云つた。

今度の旅行が、彼の憂鬱症をいくらか輕くしたかしらんと私はその時思つた。ところがその後人の噂によると、或時春夫氏はその澁谷の家で、赤インキの瓶を壁に投げつけるやうな癇癪を起したといふことなので、私は春夫氏のために悲んだ。

四

それから更に一年餘りが過ぎて、大正十二年の初夏、四谷信濃町の停車場の直ぐ前の旅館に滯在してゐる佐藤春夫氏を訪ねた。さうして關東の大地震が勃發する少し前まで、しば〳〵氏の許に邪魔をしに出かけた。信濃町の下宿は眺望も好かつたし、風通しもよかつた。久し振りで會つて見た春夫氏の態度もどこかのんびりとしてゐた。それで下宿の太つた女中が、先生々々と佐藤氏を呼ぶのも、不自然さなく愉快に聞えた。

「今年中に本が四五冊出る。近頃は毎日少しづつでも書いてゐないと、氣持がわるい。しかし、やつぱり好いものを書かうと思ふと一年くらゐは遊んでゐなくちやいけない。」

さういふ春夫氏の語調は、明るくて、たのしさうであつた。氏の創作力にもあぶらが乘つて來た樣子であり、人間としても肚も据わつたやうで、どことなく男性的な力があふれて見えた。八九年前よりも若く、若返つたやうに思はれた。きつと美しい相手も見つかつてゐるだらう、私には想像する事が出來た。

七月、佐藤春夫氏は、大森の望翠樓ホテルへ轉居した。

「隣りの部屋には、ロシヤの文豪スキターレツツ氏がゐる。」

或日私が訪ねて行くと、春夫氏はさう說明した。部屋はすつかり西洋式で、片隅のベットの空には、眞白な蚊帳が張つてある。書きものをする卓子と、應接用の卓子とがある。衣裳箱笥がある。專用の洗面所と便所とがついてゐる。浴槽もある。

「これはいい。しかし、も少し風通しのいいところはないんですか？」
「ないんだ。滿員なんだ。」
春夫氏は入口の扉を開けた。西洋人の子供が、男の子と女の子と、廊下で遊んでゐるのが見えた。
「これで一月幾らです。」
「百五十圓だから、安いよ。」
「食事は？」
「朝と晩。」
「割りに安いもんですな。」
と私は、やつと同意した。佐藤氏の身分からすればなるほど安い。それに春夫氏にはホテル生活は似つかはしい。などと思ひながら二人で、海岸へ散歩に出ることになつた。春夫氏は白の上等の靴にブラシをかけ、金の細い鎖のついた眼鏡をかけ、スタイルの好い洋

服に、しやれた夏帽子を冠つた。その樣子で、ホテルの玄關を出るところは、ちよつと日本人離れして見えた。玄關に近い廊下で、籐椅子に掛けながら、母親らしい老婦人と差向ひで編物をしてゐた若い西洋の女が、ちらとこちらを上眼遣ひに見た。多分彼女は春夫氏の樣子を見たのだらう。
さて、時刻はちやうどお午を過ぎたばかりのところで、二人共腹が空いてゐた。どこかへ食事をしに入る筈だつた。私は春夫氏がどこへ連れ込むかちよつと興味を感じた。海岸の近くで、春夫氏はバラック建の天麩羅屋へ入つて、その白い上等の靴を脱いで、先に立つて座敷に上つた。
二度目に私がホテルへ出かけた時、ある婦人雜誌の記者が來て、春夫氏に詩稿をもらひたいと言つた。ちやうど出來てゐたのがあつて、春夫氏はそれに手を入れて渡した。その間の取引の呼吸は、實に氣持よく巧みなものであつた。
「今僕も商賣をしたところだ。君の詩も一つ買つてもらひたまへ。」

春夫氏は、そこへ入つて來た堀口大學氏に冗談を言つて笑つた。

堀口氏と雜誌記者とが、新たな取引をきめるために、別室へつれだつて去つたあとに、また來客がある由を受付の男が知らして來た。それは婦人の名であつた。佐藤氏は直ぐに出て行つた。間もなく一人で歸つて來た。そこで私は氏に別れを告げて、部屋を出た。玄關に女の下駄が脱いであつた。しかし、その姿は見えなかつた。私は佐藤春夫氏のますます若々しく晴れやかな顏を思ひ浮べつゝ、ホテルを出た。（一四木生）

二　里見弴の今昔

一

大阪のさる屋形の二階に暫らく住んでゐた山内英夫氏が、新夫人を携へて上京し、麴町山元町の寓居に身を置くや否や、「善心惡心」「妻を買ふ經驗」「俄あれ」無題の小說其他を矢つぎ早やに發表して、文壇の視聽を一時に、その筆名里見氏に集めしめたのは、早いもので、もうひと昔になるが、その目ざましい華かさと雄々しさの餘り、それはつひこの間のことのやうに感じられる。まだ世間一般に弴の讀み方を知らない者の多かつたその當時、私はよく里見弴を訪ねて行つた。

大抵午前十一時前後であつた。階下の十二疊ばかりの茶の間の長火鉢の向ふに、坊つちやんを抱いて、夫人が坐つてゐられた。大變眼の大きな人で、それは神祕を湛へた湖――などと外國の小說か何かで覺えた形容詞を聯想させた。こちらの壁には三味線がかかつてゐて、むかふの床の間には大きな姿見に、美しい模樣の掩布がかかつてゐた。夫人も語らず、私も語らないで待つてゐると、階段に足音が聞え、やがて洗面の水の音が聞え――すうつと白足袋の人が入つて來る――

「やあお待たせしました。」

いつもそんな工合で、私は寢起きの里見氏ばかりに會つてゐた。仕事は夜、時には曉方

までやつてゐるといふのに、格別疲勞の色も見えず、磨き上げた白瑪瑙のやうな澤やかな頰額、秀でたその額の上に際立つ黑髪、きりつとした眉と口元、上品な鼻筋、殊にその深味のある澄透つた瞳――その瞳は、夫人の眸の潤ひとよい對照をなす輝きを持つてゐた。――それらの整つた美貌が、潑剌として生氣を放ちながら、しかも物柔かな、思ひやりのある、苦勞人らしい態度や口吻が、訪問記者といふ招かれざる客商賣の私を悅ばせ、感謝させた。殊にうれしかつたのは、いつ訪ねた時にも、藝術家にありがちのヒステリックな憂鬱や、氣むつかしさを見せることなく、きちんとした賴もしい態度の應待を見ることであつた。

里見弴氏の藝術も異彩を放つたが、その人物も光彩を放つて、私の目には當時の文壇の薄汚ない家鴨の群の中に、高いところから一羽の白鳥が降りて來たかと見えた。

その頃の里見氏は文壇的に孤獨であるやうに見えた。白樺の搖籃から集立つた仲間の志賀直哉氏とは絕交し、武者小路實篤氏や、長與善郎其他の諸氏とも、離れて獨立してゐたやうに思はれる。白樺の同人がまだ〳〵一般文壇から繼子扱ひの冷遇を受けてゐた中に、志賀氏と里見氏とは、例外として認められてゐたことであり、中央公論に題をつけない小說が發表されて、つづいて新潮に「お菊按摩」が現れて、里見弴氏の位置は、日本文壇に確定したのであるが、まだ文壇の多くの人々は里見弴氏と交遊しなかつた樣子である。

しかし、どこへ行つても小說の話が出れば、必ず里見弴氏の噂が出た。當時の武者小路氏は既にその非凡な天分を恐れられながらも、一面人氣の中心とはなり得ないで、志賀氏と里見氏、この二人のどちらが果して偉いか、偉くなるか、と論ずる者があり、「俄あれ」の文章の巧さを、題をつけない小說の奇拔さを「お菊按摩」の空想力の豐富さを、その他すべての作品の技巧の新鮮と、構想の巧妙さを、評判し賞讃する者があり、里見弴氏の人氣は漸やく沸騰して來た。

種々の雜誌から、小說を註文して來るので、里見氏は多忙になつた。次々に創作を發表した。それが皆重みのある、技巧の洗練をつくしたものであつた。新聞雜誌へ揭載する◎の談話も、氏自身筆を執つて書いたかと思はれる程、正しく立派であつた。氏の發表するものは、悉く一字一句忽にしない程嚴格に見えた。

學習院時代は、猿とあだなされたくらゐの茶目であつたといふ氏を、氏の書齋に見る時は、小柄とは言へ、寸分の隙のない、しかも落ついた態度の堂々としたところに、大家の風格があつた。氏の山元町の書齋は、二階の八疊ばかりの部屋で、朱塗の机の外には、何一つ目につくものはなかつた。いつも次の間からずつと綺麗に片づけられて、一體何時氏は小說を書くのだらうと不審を感ずるほどであつた。滅多に膝も崩さず、叮嚀な言葉遣ひで話をする。しかし、決して話を勿體をつけたり、思はせぶりな口吻を弄したりすることなぞなく、正直で氣持が好かつた。

「中央公論の瀧田氏が、初めて手傳で訪ねて來られた時には、うれしかつた。」

などと惇氏は、無邪氣なことを言ふのであつた。

「文學者になる者は、軍人となつても將官くらゐにはなり、商人となつても十萬圓くらゐ儲ける程の頭がなくてはいけない。」

と、氏はまた自信を語るのであつた。

「僕は小說家となつても、生活に苦んでゐては、到底幸福ではないと思つて、最初は商人にならうと思つた。商人になつて金を儲けて、藝術家のパトロンにならうと思つた。そのうちに母方の家名をつぐことになり、その遺產の高が、どうやら一生の生活を支へるに足るだけあると知つてから、自ら小說家で立たうと決心した。」

とも述懷を漏らした。

この言葉は、ちよつと聞くと、里見惇氏を享樂主義者——は當らないと思ふが、一身の幸福を求めて生活する人かのやうに考へさせるだらうが、その實里見氏のこの言葉の山つて來るところは、小說といふものが、さう容易に書けるものでなく、小說家として世に立

つことは、なか〳〵むつかしい、だから、そのくらゐの大事を取らなければならぬ。といふ藝術を尊重する氣持から發したところのものであらうと思はれる。

氏は藝術を尊重し、創作態度に十分な潔癖を持つと同時に、所謂古風な人情家と言つたやうな風格が、その當時の氏の身邊に材を取つた作品を通じて窺ひ知ることが出來たが、或る時、德田秋聲氏の何とかいふ作品に加へた批評によつて、里見氏が美しく豐かな人情家であることが明快に理解されたと同時に、また評論に於ける氏の筆力が如何に鋭敏透徹なものであるかが知られた。その頃の德田秋聲氏の作品は、誰も文句をいふ者はないほど權威があつた。それを里見氏は容赦なくやつつけて、秋聲氏を畏服させたのだ。何でもその作品は、病氣で死んだ子供に對する父親の氣持が餘りに冷酷で、それを肯定してゐる作者（德田氏）の態度が怪しからんといふやうなことであつたと、筋は朧ろに記憶にとどまるが、評者里見氏の公憤的な、尖鋭な、莊重な、堂々として眞劍味の溢れた論鋒のリズムは、今も私の胸裡に刻みつけられてゐる。

とにかくに、文壇に賣り出した當時、山元町時代の里見弴氏は、如何にも華々しく、頼もしく、奮鬪的であつた。一心不亂の精進ぶりが見え、創作三昧の境地に入つたかの如くであつた。私など氏の內生活を殆ど知らない者の眼には、氏が未だ他の文壇人と交渉が少くて孤獨に見えれば見える程、一層氏の藝術家としての頼母しさを感じたことであつた。

さうして、これより時稍々後れて、有島武郎氏が文壇に現れ、有島三兄弟として、武郎、生馬の兩氏と共に、里見弴氏の名が喧傳せられるやうになつてからも、三兄弟中弴氏の人間により多く惹きつけられた者は、決して私ばかりでなからうと信じてゐる。

三

里見弴氏が新たに家を建てゐるといふ噂が傳はつた。それは事實で、敷地は右京町に出來たといふ確報が傳はり、建築費何萬といふ話を聞いた。

いよ〳〵新築落成を告げてから、私が初めて右京町の新邸を訪ねると、里見氏はきちん

と袴を穿いて、私を洋風の應接室に導いた。そこへ通る前に、夫人によつて私を通された小ぢんまりとした四疊半ばかりの書齋で、私は一人の青年に會つた。青年はそこにあぐらを組んで、ぶつきらぼうに挨拶をした。初めて會つたのだが、彼は少しも取繕つた風をしないで、不敵な面構へで私の方を時々ぢろつとつきの好くない眼光で見い〳〵、不遠慮な口吻で話しかけた。私はそれまでも不良青年といふ者に出會つたことはなかつたが、その時不良青年とは、こんな奴ではないかと思つた。で、その青年には餘り相手にならないつもりで、碌々口も利かなかつたが、その青年が、中戸川吉二氏だといふことは、後日に至つて知つたことである。その時私はその青年が、間もなく新進作家として名を擧げようとは思ひかけず、また里見氏と深い交渉のある男とも氣づかなかつたこと勿論である。

「近頃地方の文學青年から、書生に置いて貰ひたいと言つて來る者が多くて困ります。」と應接室で里見弴氏は語つた。「中にはね、夫婦で以て志願して來たのがあるんです。細君は女中代りに置いてくれといふんですよ。」

里見氏のところばかりでなく、その頃の新進作家のところには、さうした志願者の手紙が束になつて來たり、小説の檢閲依頼や、金錢の無心にやつて來る者が夥しかつた。それらに對して里見弴氏の應接ぶりは、親切過ぎるくらゐ親切なものであるらしかつた。後の中戸川吉二氏夫人が、弴氏の許に出入したのもこの頃であらう。氏の「おせつかい」といふ作品の題材がその間に生れた。

やうやく弴氏の周圍には、文壇の人々が集つて來て、よく遊びの噂が里見弴氏を中心に傳はり始めた。間もなくその噂の人々が弴氏を中心に人間社を興し、雜誌「人間」を發行した。同人は、吉井勇、田中純、久米正雄其他の諸氏すべて遊びにかけての猛者連であつたから、弴氏の生活は、華々しく賑やかなもの丶如く見られた。が、筆者はその間の消息を殆ど知らない。ただ、その頃は里見弴氏が最早謂ふところの押しも押されもせぬ大家となつてゐたことと、しかし、まだ漸く氏の作品が往々技巧の末に走つて、不評を蒙ることのあるやうになつたことと、しかもなほ時折、「父親」等の名作をなして、光つたところ

を見せてゐたことを知つてゐる。

「人間」廢刊の運命が迫つた頃、里見氏は右京町の新邸を貸家として明け渡し、家族と共に湘南の地に移り住んだ時、氏は氏の財産を殆ど失つたといふ噂があつた。

「里見弴氏は、これから創作一方で生活して行く決心ださうだ。」

文壇の或る者が言つた。

「うむ。それは好いことだ。」

文壇の他の或者が言つた。

彼等は、以前里見氏が言つた、小説家に志すの言をその時思ひ浮べたであらう。

四

この正月のある日、下六番町に私は里見弴氏を訪ねて行つた。泉鏡花氏の住居の斜向ひに、山内英夫、その傍らに稍小さく里見弴とした新しい標札が、門にかかつてゐる。その筆跡を見ると、今年の「新文章日記」に載つてゐる弴氏の題言「熟不敢」の筆跡を聯想して、近頃書の稽古を始められたかなと思ひながら玄關にさしかかつた時、後から洋裝の少年が私の傍をすりぬけて、格子戸をあけて家へ入つて行つた。弴氏の子息で、山元町時代にはまだ夫人の膝に抱かれてゐた坊つちやんだ。さうだ。大きくなつたなと私は思ふと共に、里見氏にも久しく會はないことを、今更に思ひめぐらして、どんなに氏の風貌が變つてゐることか、何時であつたか寫眞で、有島武郎氏の墓前に、愼ましげな裡にどこやら皮肉な表情をして立つてゐる姿を見たつけが……などと考へ、さて案内を乞ふと、背の高い青年が取次に出た。

幸に在宅で、二階の書齋に通された。障子の外、廊下に立つて、

「御免下さい、」と言ふと、

「どうぞ。」と、はつきりした彈力のある聲が近々と答へた。

里見氏は、有名な朱き机から半身向き直つて、封筒か何かを持つ手を動かしながら、私

を迎へた。その頬、その眼、その額、その頭、髪――昔のままだ。若々しく、さうして鋭く、どこやら人懐つこく。

「隨分久しぶりですね。」

弾氏は忘れてゐた人間を、ひよつくり見出したやうな調子である。が、私は考へて見れば久しいが、氣持で言ふと、つひこの間まで會つてゐた人のやうに考へられた。餘りに氏の容貌に變りがない。

だが、私は部屋の様子の昔と餘りに變つてゐることに氣がついた。勿論それは震火の後の假りの住居ではあるのだが、朱き机の上に亂然と置かれた原稿紙や、ゲラ刷、書簡類、一方の壁の上の棚に雜然と並んだ書籍雜誌類。山元町時代の塵一つとどめないやうな座敷の様とこれとは、東京の下町かバラック街に變つた程の變りやう。

「おらくに――。」と、弾氏は膝をくづしたまゝ言つた。

「以前この邊に生馬さんがゐらつしやいましたね。」

「えゝ。ついそこでした。この家も生馬の貸家なんです。ここが一軒明いてゐたものですから、取敢へず引移つたのです。」

「右京町の家は無事でしたか。」

「えゝ。ただ藏が崩れたので――」

「あの家はお賣りになつたわけぢやないのですか。」

「まだ持つてはゐます。が、今修繕さしてゐるのです。」

割合に親しく、弾氏と私とは、そんな風に漫談をつづけて行つた。

「右京町には、何年位居らつしやいました？」

「三年ばかりですね。」

「そんなに居らつしやいましたか――すると山元町に居らつしたのは、餘程以前になりますね。」

「え。あの家で生れた子供が、今年八つになりますから。」

十年になるのだ！　その十年の間に里見弴氏も隨分仕事をしたことだ。赤い布をかけた朱い机に、實業家岩谷松平と同じ好みだが、彼も弴氏の精力家である點では似てゐるやうだ――そんなとてつもない比較がその時私の頭の中に浮かんだ。

紫檀の脇机の上に、「多情佛心」の校正刷が載つてゐた。そこで、

「――多情佛心の中に、說いてある、眞心といふのは、どういふことなんですか？」かう愚問を――しかしあの作の根本思想と思つて――發すると、

「あはははは。」と、弴氏は輕く笑つて、さて說いていふのであつた。「人間が、あゝしたいかうしたいと思ふことは、よく考へると、實にあやふやなことが多い。戀にしても、ただ友達のやうになりたいのか、結婚をしたいのか――結婚をしてしまへばそれで好いかといふとさうでもない――仕事にしてもさうだ。ただやつて見たい、やりたいといふやうな工合に、多くはトライ――試みの場合が多い。實際一生意志といふものを有たないで終る人も有り得るのですからね――。で、さういふトライ――試みでなく、かうしたい、あゝしたいといふ意志の强度も深度も、並々でないものを、私は眞心と言ふのですが――。」

それから話題を轉じて、

「何でも書かないでゐると、氣がすまないといふやうなものなら、何を書いてもものになります。」と、弴氏の創作談が、ちよつと出たが省く。

「善心惡心當時から見ると、お書きになるものが、餘程樂々と行つてゐるやうですね。あの頃の物は實に力瘤が入つてゐました。「直輔の夢」なんかは、非常に評判が好かつたのですが、すら〳〵とお出來になつたのではないのですか。」

「えゝ。すら〳〵書けました。樂に書いてよいこともあるし、どうも出來榮えの點はどつちがいいかわかりません。が、やつぱり苦心しつゝ書いた方が本當に好いんでせう。――しかし、あつちこつちから賴まれて、無理矢理に書いてゐたんでは、十分苦心してもゐられませんよ。――書きすぎるのがいけないんですね。」

さう言ひながら、里見弴氏は、三つもつづけさまに欠伸をした。

私は慌てて心には歸り支度を始めながら、再び取散らかつた部屋の中を見た。朱き机の上を見た。さうして、里見氏の創作もいつの間にか職業的になつたやうに考へた。氏が再び山元町の昔の孤獨に歸つて、精進する日の來るべきことを祈りたい氣がした。

（一四本生）

女流評判記

一

明治三十年代に出た女流として、與謝野晶子をもつてくる。彼女は堺市に生れ、そこの女學校の學生であつた頃から『明星』へ和歌を投書してゐた。

暖き少女の胸に觸れも見でさびしからずや道を說く君

の歌の如きは、あらゆる舊道德に反抗して戀愛至上を高唱したもので、彼女の情火の閃めきの如何に烈しかつたかを知られる。

程もなく「鳳晶子」の名が「明星」から消えて、「與謝野晶子」の名が同誌上にあらは

れたときには、新詩社の若い歌人達は驚異の眼をみはつた。

鐵幹の妻になつた彼女は、決して平凡な世話女房になつて仕舞はなかつた。家庭の主婦として、夫君の世話をし、子供の面倒を見る間に、彼女は相變らず歌を詠み、小說を書き論文を草した。

しかし、彼女については、いまだに毀譽褒貶半ばしてゐて、ことに彼女の歌壇における功績を、歌壇人等は殆んど眼中においてゐない。それは啄木の歌を彼等が本質的には眼中においてゐないのと同じやうな意味からで、つまり、言はば專門的でなく、一般的であるといふ理由によるのである、ここにいはゆる專門職人としての歌壇人氣質があり、その偏した馬鹿々々しい世界からだけ文學を見ようとするのであるが、しかし時と一般讀者とが嚴正な批評家である限りにおいて、彼女の功績は見逃しがたいものである。

日本のやうな國で、名をなさうといふには、並大抵なことではない。一般讀者ですら茶化した目で見たがるし、ことにその女に侮りがたい獨自な才能や見識がある場合、その才能そのもの、見識そのものが既に不逞なものに見えるといふしまつである。

だから、彼女が今日の勢力をかちえてゐるのは、背後に溫厚で博識な夫君鐵幹があり、それらの理由から、交際が溫厚な士君子もしくは有閑社會、學者等にもとめられ、したがつてブルジョア繁盛の今日においては、これらの背景が一に彼女を有名ならしめてゐるので、さうでなかつたら、或ひは彼女はいまに孤獨、さうして鬪爭の人でなければならなかつたらう。

しかし、この背景は、必ずしも彼女の藝術家としての價値を高めてゐないのみか、却つて寧ろ墮落させてゐると見るが至當であらう。

二

女流小說家宇野千代は岩國の女學校を卒業後、暫らく小學校の敎師をつとめてゐたが、上京して女事務員になつたり、カフエの女給になつたりしてゐた。最後に本鄕三丁目の燕

樂軒といふおいしい料理と甘い外國酒を安價に賣るので評判、ことに文壇人等に評判のカフェに女給と住み込み、いろいろな作家を知ることが出來るやうになつた。

そのうち帝大法科出身の藤村忠氏と懇親となり、ついで結婚し、その任地北海道へ相携へて行き、時事新報の懸賞小說に「脂粉の顏」を投じた。その選者の久米正雄は、この作品に最高點を與へたが、後になつて、匿名でなくて藤村千代の作だと知つてゐれば最下點をつけるのであつた、と云つてくやしがつたさうである。但し、久米が燕樂軒時代の彼女に反感をもつてゐたことがうかゞひ知れる。久米が反感を持つやうなことろのある女給そこに彼女の偉らさもあつたのであらう。

續いて中央公論に「墓を發く」を發表するに及んで、名聲高まり、その作品なり、意識なりが、一定の型において完成してゐる今日、最早彼女の位置は確實となつた。

しかし、どうかすると彼女もまた、男の側からはいはゆる不逞視され、女の側からは妬まれる傾きがある。それは彼女の手腕の確實であればあるほど。

三

中條百合子は小石川原町、中條家の長女として生れた。父は精一郎、舊米澤藩の人、米國劍橋大學出身の建築家、母方の祖父は文學博士、貴族院議員、華族女學校々長の故西村茂樹であつた。

お茶の水高等女學校卒業後、すぐ日本女子大學に入つたが、後文學博士坪內逍遙の知遇を得、「貧しき人々の群」を中央公論に發表、世評囂々たるものがあつた。

その後渡米、結婚、しかして今は離婚、離婚後の今日、中央公論、改造などに、續々大作を發表して、聲名をはせてゐる。

名門から出たといふことが彼女の聲名を高めた一の原因ではあらうが、しかし、それのみにかこつけようとする一般文壇人の批評眼は怪しいと云はなければならない。彼等は作品そのものを見ようとはしないで、すぐにその作家にハンデキャツプを附して安心滿足し

ようとする風がある。こんな不眞面目な國にあつては、女流作家は到底擡頭しがたい。外國にのみ偉い女流作家がゐるといふわけではなからうし、日本だつて、もちつと眞面目に女流作家に注目がされたなら、自ら女流作家の才能、力等がおもてむき現はれてくるであらう。

中條百合子にしても、今日における聲名――と云つても、それは淺薄な意味における聲名で、何等本質的な意味をそこに認めようと一般がしてゐないことは明らかであるから、彼女の手腕が一層確實になり、侮りがたいものになる場合にあつては、その聲名は必ずや下火になり、一般が、否文壇人が默殺無視するに至るであらうことは見え透いてゐる。

何にしても女はむづかしい。彼等は女として特殊的にさわぎ立てようとする意識だけが強いから、よほどすぐれた、不世出のやうな天才でない限りにおいては、眞面目な意味において注目されることはむづかしい。

同等な手腕をもつ者にあつても、一方が女、一方が男である場合には、男は眞面目に評價されるが、女はハンデキャップを附せられたり、不純な意味において騷ぎ立てられたりはしても、結局、件の男と同等な手腕をもつてゐるといふことですら認めないのである。

手腕のまるでない女は、これをよいことにして出てき、さわぎ立てられるやうなことも無いとは言はれないし（たとへば三宅やす子など）、どちみち不世出の天才以外の女流は眞面目な意味においては顧みられぬといつても強ち過言ではないやうである。

野上彌生子なども、いつのまにか影うすくなつてしまつた。

三

高群逸枝は以上の女流に比べて、全く違つた立場にある。

以上の女流は、すべての意味において個人主義的で、情熱は個人主義的情熱、理性は個人主義的理性であるが、彼女はすべての意味において社會的である。

その證據としては他の女流と彼女とはその文壇的出發の根柢を異にしてゐる。他の女流

はすべてが、「作家」として立つてゐる。

だが、彼女は處女作「日月の上に」の冒頭に、反藝術至上を掲げ、民衆人の立場から文壇人的生活を否定してゐる。

また「放浪者の詩」において、自分は貧乏と虐待と虚無と嘲笑、これらのあらゆる社會のどん底からきたと云ひ、反抗と、さうしてその上に立つ建設の意識とを明かにしてゐる。

最近の著、「東京は熱病にかかつてゐる」は「日月の上に」や「放浪者の詩」の激情的であるのに比して、著しい變化を見せてゐるが、その基調が通じて社會的個人性にあるのであるから、激情的であると、理性的であると問はず、そのスケールが大きい。

世人は、それを彼女が好んで誇張的な表現をとるかに云ふ。さうして、一層長篇や、激越的作品によつて誇示するかに云ふ。が、そのいはゆる大きい世界は、ひとり長篇や、激越的作品で示されるのみではない、極めて短い、極めて靜かな小詩においても表現されてゐる。

×

馬の獨り野にありて
俯向くを見ずや
とこしへに
馬の獨り

×

ここに
古城趾に草あり
その草は
み空の如く青かりき

×

ほとほとと

戸を叩くものあり
夜は
物凄くなりぬ
×
星も及ばず
地は暗らがりの痼疾
かれ深き根を
地獄にもつ

彼女は最近「無産階級の戀愛思想」を論じて、ブルジョア階級の戀愛思想が標榜したものは「結婚制度の改革」であつた、新興階級のそれは「結婚制度の廢止」にあらねばならぬ、この思想は私有財産制度廢止と共に、將來新興階級の二大眼目である、と指摘してゐる。

『戀愛創生』はこの思想を中心としてかいたといふが、それによると、その結婚廢止論が嚴肅なる意味をもつ男女論から出てゐることを了解することができる。

彼女は落魄した家庭に人となり、何等學歴の見るべきものなく、文字通り無産出身であり、したがつて今日の苦闘、またこれからの苦闘は、女性であるだけ一層酷甚なものがあるに違ひない。

彼女の作品は、階級と共に未完成であり、飛躍的である。そしてこれは同時に、社會人的立場にあるすべての者の特色である。

文壇修業記

一　職工生活から文壇へ

私が二十有餘年の勞働生活を止めて、漸く文壇の末席に列するやうになつたに就いてはかなり苦悶があつた。それは誰でも同じことである。私は永い過去を顧みて、一番殘念に思ふのは、小さい時から旅へ出てゐたので、両親の死目にも三人の兄弟の死目にもあはないことである。

ユーゴーだつたか「自分の過去を顧るゝ如何なる芝居の脚本にも勝る悲劇喜劇がある。」と云つてゐた。私も時々過去を追想するのが好きだ。今となつて見ればもう一度あんなことをやつてみたいと思ふことが屢々ある。

私の生れ故郷は林檎の花咲く青森縣の黒石町である。秋田雨雀氏は私と同じ町だ。私の家は半農半日雇稼であつた。家は貧乏なので、私が元の尋常四年を卒へるとすぐに、受持教員の紹介で町の小さな活版所へ小僧にやられた。活版所に足掛け五年ほどゐた。活版所に石塚と云つて濱から（青森の事）流れて來た、その頃二十前後の文選工がゐた。

活版所へ行つて間もない初夏のある日だつた。私は薄暗い紙截室で晝寢してゐると石塚はいつの間にか私の背中に乘つてゐるのであつた。

「何にするだえ。」私は石塚を蹴飛すと、

「オイ靜かにすらう。」と云ふのだつた。

今、思つて見ると石塚はその時私を稚兒せうとしたのである。それにも拘らず私は石塚が好きであつた。

それは石塚は中學二三年まで行つてゐたので、七八人ゐる職工のうちで一番物識であつ

たからである。石塚はよく私に傳奇的な話を敎へてくれた。

或る日私は石塚にかう訊いたことがある。

「人間は成功するにどうしたら一番早道だらう。」

「何んでも金持に泣き付いて、學資金を出して貰ふだなァ、例へば宇野清さんのやうな大金持へ幾度も〳〵行つて、向ふが我を折るまで泣き付いて賴むだなァ、今、博士になつてゐる〇〇さんも△△さんもゝゝさんも皆さうして豪くなつたのだ。だからお前なんぞ未だ若いからこれからだ。一つ宇野清さんの處へ行つて學資金を出して貰ふやうに賴むだなア、そして、みつしり勉强すりや何にでもなれるよ。」

石塚の云ふ話は一つ一つ若い私の好奇心を煽動せずにおかなかつた。それで或る日私は縣下の富豪宇野清の家を訪ねた。處が、門から勝手口に通ずる中央に熊のやうに獰猛な尻尾を左に捲いた純日本犬が二疋並んで寢そべつて、知らないものが入ると誰にも嚙み付さうな狀態を示してゐたので、私は幾回も〳〵門前を往つたり來たりして、犬が何處かへ姿を消すまで時間を費した。漸く犬が裏の林檎畑の方へ行つたので、私は門内に入つた。そして、宇野清に會つて學資金を出して貰ひたいことを話すと、

「うん、さうか、豪い心掛けだ。だが、東京邊では大學を出ても巡査や車掌になつてゐるものが澤山ある。そんな風だからむしろ、立派な職人になつた方がよからう。苦學して成功するものは千人に一人も六ッかしい。大抵は中途で墮落してしまふ。一體お前は幾つだ。」と宇野清は諭すやうに云つた。

それは私が十五の春であつたと思ふ。

活版所に十六の暮までゐたが、自分で辨當をもつて、一月四圓しかもらへなかつた。その頃長兄は不治の結核に罹つてゐたので、本家からかなり借金があつた。私は借金の利子を出すため、北見の漁場へ四月間、僅か二十圓の約束で買はれて行くことになつた。私は北海の荒くれ男に揉まれて、四月間泣いて暮した。

北見の漁場から歸つて、暫く私は郵便配達をした。併し、何にも出來ない癖に自尊心の

強い私には、郵便配達が一番嫌であつた。

その秋私は遠縁にあたる石狩の山奥で工夫をしてゐる人を頼つて再び北海道へ渡つた。それは十七の秋である。そして、鐵道工夫を一年ばかりやつたが、工夫では出世が出來ないと思つたので、旭川へ出て機關庫の掃除夫になつた。

だが、檢束のない工夫生活が戀しくなつたと共に、掃除夫は日給三十錢でどうにもかうにも、生活が出來兼ねたので、半年ほど勤めて罷めた。そして、再び鐵道工夫になつて、二年餘り勤めた。併し、またも工夫が嫌になつたので、今度は放浪生活を始めた。

そこで、小さな竹行李を背負つて、白樺のステッキをついて、十勝の曠野を漂泊つて歩いた。或る時は土方の手傳ひに、或る時は人夫に、或る時は百姓の日雇に轉々と歩いた。私はその頃、勞働者であると共に、詩人であつた。併し、歌も詩も作れなかつたが、とほとほ小さな行李を背負つて、口笛を吹いて歩き乍ら、人生の悠久を考へたり、芝生に腰を卸して、凝乎と北國の自然を眺めたりすると、ひとりでに涙が湧くのだつた。一面私は非常にロマンチストであつた。

十勝の池田と云ふ處で働いてゐたときだ。「君、樺太は非常に景氣が好いさうだ。人足でも一日二圓以上になるさうだ。どうだね、行つて見たら。」とある人が敎へてくれたので私の好奇心がすぐ樺太へ行つて見たくなつた。そこで私はその人に銘仙の羽織を賣つて、樺太へ行く旅費を拵へた。

もとより樺太には一人も知己がゐなかつた。だが、政府は樺太開拓に力を入れてゐた當時だつたので、仕事がいくらもあつた。併し、賃金は噂ほどよくなかつた。私は樺太へ上陸した次の日から電柱を建てる人夫として働いた。それも暫くしてやめて、樺太時事新報の文選工になつたが、三四年、活字を拾はなかつたので思ふやうに仕事が出來なかつた。とどのつまり新聞社を抛り出された。

それから鐵道院に人夫を供給する阿部と云ふ家に起臥することになつた。岩手縣の人で割合に私を親切にしてくれた。

阿部の家にごろ〳〵してゐたときだ。海軍に來てゐた甥は、ときゞ〳〵若い私の心をそゝるやうに「北國は未だ綿雪がチラ〳〵飛んでゐるやうだらうが湘南の天地はもう春のシーンが漲つて、梅も椿も綻び、梢には鶯が鳴いてゐます」こんな文句を繪ハガキに書いて寄越したので、例の私の好奇心が矢も楯もたまらず横須賀へ行きたくなつたのである。

そして、途中、一寸故郷に立ち寄つて眞直に横須賀へ來た。併し、甥は軍人なので、私の生活には殆んど沒交渉だつた。で、私は横須賀へ着いたその日からパンに差閊へた。次の朝から北海道から持つて來た印袢天を着て、海軍工廠の門前へ立ん坊に出掛けた。

私は工廠へ入るまで立ん坊の傍ら、國から林檎を取寄せて、大道で賣つた。處が、或る日巡査部長に「お前は鑑札を持つてゐるのか。」と突込まれ、散々小言を云はれた揚句、その日から商賣を止めなけりやならなかつた。そのためありもしない金を十四五圓損した。

その後間もなく私は海軍工廠の職工になつた。そして、昨年の十一月馘首になるまで滿十年餘り勤めた。

私は横須賀へ來て四年目に妻を迎へた。丁度その頃、國から兄の子が職工になりたいと云つて私を頼つて來た。兄の子は私に文學を注ぎ込んだのである。兄の子は田舍で、文章世界や文章倶樂部を讀んでゐたらしかつた。確か兄の子は文章倶樂部の創刊號二號三號、それから文章世界を五六冊持つて來た。

私はその頃、大した職工で熱心なキリスト信者だつた。兄の子は頻りと私に文藝書を讀めと勸めるので、つい私も讀む氣になつた。その頃は自然主義の隆盛時代で、告白的の小說が多かつた。

「この小說はなか〳〵好いだよ。」と兄の子は云ふので、讀んで見ると何だか私にも書けさうな氣がするのであつた。

それで私は、文學に入る捷徑として、新潮社發行の文章講義錄を取つて讀んだ。そして私は北見の漁場を背景にして叙事文を添削して貰つたことがある。その時選者は「これ丈の深刻なこと、これ丈の大きなスケルを書いた小說は現文壇に殆んどない。」と激賞してく

れた。それに力を得て私は工廠から歸つて、茶餉臺を机の代りに、毎晩いろいろなものを書いたり、讀んだりした。

それは大正六年、私が二十七歳の時であつた。その頃私は碌に手紙も書けなかつた。今でもさうであるが、今から思ふとよく年甲斐もなくやつたもんだと自分乍らあきれる。

大正六年三月、私は初めて文章世界に投稿した。選者は中村星湖氏だつた。四月號と五月號に續けて當選した。併し、それは七八枚の短篇だつた。その年十月號から文章世界は二十枚の短篇を募集した。十二月號の「富良野川邊りの或村」が當選した。そして、本欄に島崎さんや近松さんなどと肩を並べて出たときは非常に嬉しかつた。確か時事新報で加能作次郎氏が褒めてくれた。

大正七年八月號に「南瓜盜人」が當選した。そのとき、本欄の顔振れは田山さん近松さん加藤一夫さんであつた。大正八年は一度も當選しなかつた。

大正九年の六月號に「海岸の丘」が當選した。そのときの本欄の顔振れは加藤武雄さん上司小劍さんであつた。當選するごとに地方の文學青年から讃辭の手紙を貰つた。私は文章世界に書いた頃、雅號牧星で發表した。(序でに茲に斷つておくが、少年倶樂部の編輯に私と同姓の加藤牧星と云ふ人がゐるが、あれは私と別人である。先日も雄辯會へ行つて會つて來た。矢張り私と同國の者である。私よりはずつと若い人だ。私はこれまで「君は少年倶樂部の記者になつたのか」と五六度聞かれたことがある。少年倶樂部の加藤氏もそんなことを聞かれたと先頃も話したゐた。)

大正十一年十月、解放秋季特輯號に私の「職工思想調査」が當選した。最初あの作は千葉市から出てゐた「簇生」と云ふ雜誌に發表する積りで書いたのだ。それを投稿した處、幸ひ當選したのである。それでいくらか認められて、私は三流處の雜誌や新聞にこれまで雜文や創作を四つ五つ發表して來た。地方の新聞にも二つ三つ發表した。

田山さんだつたか、近松さんだつたかゞ、かう云つたことがある。

「何事も十年の辛抱だ。鍛冶屋になるのも、桶屋になるにも、七八年、年期を勤めなけ